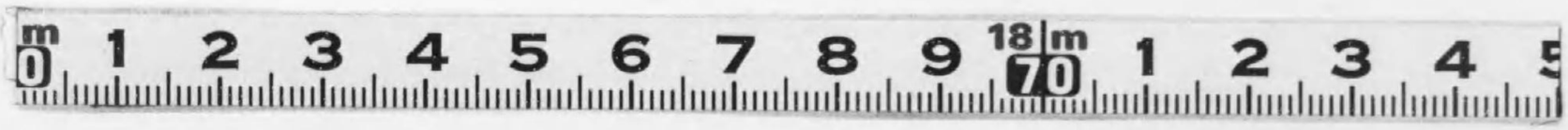
515
130



帝國圖書館藏

長い歸りの船路

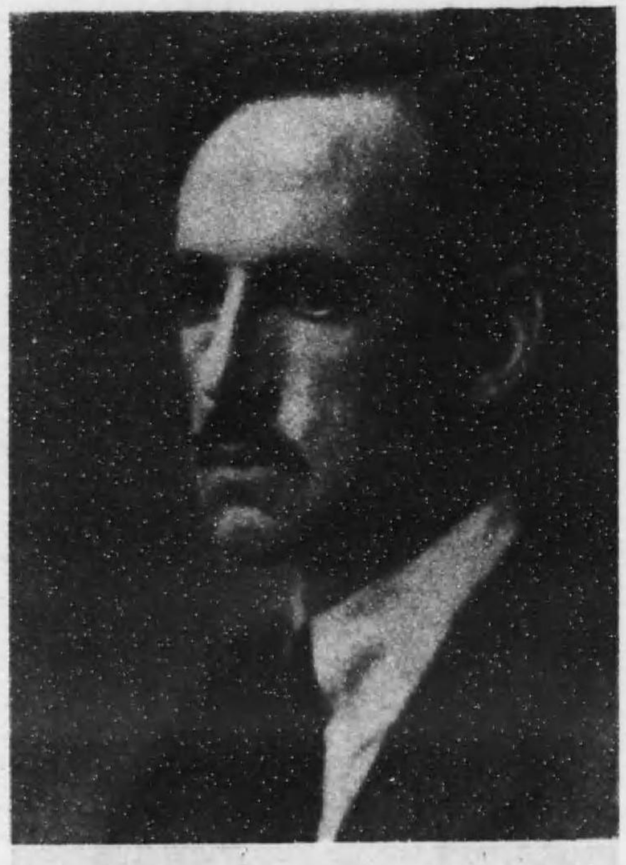
ユーヂン・オニイル作

北村喜八譯

海外文學新選(9)

亞米利加文學

大正
13.7 4
內交



編纂者

有島生馬（伊）
千葉勉（英）
笠井鎭夫（西蘭）
片上伸（露）
ルビエンスキイ（波）
永田寛定（西）
田代光雄（獨）
山岸光宣（獨）
山内義雄（佛）
横山有策（英）
米川正夫（露）
吉江喬松（佛）

——ABC順

序

この譯書の作者ユーヂン・オニイルは、一八八九年に、有名なる俳優ゼエムス・オニイルを父として生れた。彼は、名も無い放浪的な水夫生活から身を起して、戯曲に筆を染めたのは、この數年前の事であるにも拘らず、今日では、その本國の米劇壇の流行兒であり、唯一の誇であるばかりで無く、その戯曲は、飜譯される以前に既に、ヨーロッパ諸國で讀まれ、各市で上演せらるゝに至つた。彼オニイルは、巷間傳ふるところに依ると、手に負へぬ悪童であり、生長するに從つて、バッシ■ネエトな空想的な少年であつたらしい。學校教育は彼には枷であり絆であつた。彼は早くも放浪的生活に身を投じ、ボウナゼアリス行の一帆船の水夫となつたのを始めとして、續々な海の生活——荒荒しい粗暴な、男らしい冒險に充ちた、力强い海の生活を味つたのである。そして、彼は其處で、假面を脱いだ人生を——露はな魂の姿を見たのである。海はいつも、神祕な夢と男性的な力とを藏してゐるやうである。この海の神祕な夢と、男性的な力と——それを通して現はれた生々しい人生を描いたのが、彼の出世作である「カリビイの月」と題する一幕物集である。此處に譯した「鯨」（一九一六年）「長い歸りの船路」（一九一六年）「十字の在る處」（一九一八年）は、その一幕物集に收められた三篇である。

彼の主として描くところのものは、人間の夢と願と、而してそれを絶えず裏切る現實の慘ましい姿である。人間は絶えず目に見えない彼岸を憧れてゐる。然し、救や魂の昇天は容易に許されない。人は、いつまでも原始の儘の感情と、人間的な弱さと、野獸的な血との中にのた打つてゐるのである。近代人はそれを掩ひかくし、支配する事を知つてゐる。然し、假面を一枚剝げば、アリアン種族がヒマラヤ山の麓から歐羅巴に侵入したその時の儘なる姿を持つてゐるに過ぎないのである。彼オニイルは、一時は活動的な社會主義者でもあつた。哲學的なアナアキストでもあつた。然し彼はそこに留まることが出來なかつたのである。彼自身も言ふやうに、人生は爭鬪である、而も、よし普通で無くとも屢勝利の無い爭鬪である。何故なら、それは、多くの人間は、その心の內部に、自分の夢や願を裏切るサムシングを持つてゐるからである。それ故に、彼は、昇天をあこがれながらも、昇天の無い暗い現實を見ずにはゐられないのである。其處から、彼の悲愴な、時としては、皮肉な詩が生れて來るのである。この點に於て、彼は、人間性の血の底を流れる、太古にして永遠な姿を描いてゐるやうに思へるのである。

彼には上述の「カリビイの月」以外に、長篇戲曲「地平線の彼方」「藥」「アンナ・クリスティ」「皇帝ジョンス」「ヘアリイ・エイブ」「凡ての神の子は翼を得」等がある。

譯　者

目　次

原作者の肖像
長い歸りの船路……一
鯨……四三
十字の在る處……八三

長い歸りの船路（一幕物三曲）

ユーヂン・オニイル作
北村喜八譯

815-130

帝國圖書館藏

長い歸りの船路

人物

ファット・ジョー　曖昧屋の亭主
ニック　誘拐者
マッグ　女給
オルスン
ドゥリスコル
コッキイ
イヴァン　英國の不定期船グレンケエアンの船員
ケイト
フレェダァ
無頼漢　二人

景

ロンドンの川岸にある下等なもぐり酒場――薄汚ない、煙つた部屋で、壁の張り出しに置いてある幾つかの石油ランプで、薄暗く照されてゐる。

左手に酒臺。

その前に、隣室に通ずる扉が一つ。

右手に卓が數個、その周りに椅子。

正面には往來に通ずる扉。

酒浸りの、間の抜けた顔をした、だらしの無い女給が一人、酒場に雑巾をかけてゐる。その腕は、機械的に前後に動き、立ちながらうとうと居睡してゐるかのやうに、眼は、半ば閉ぢてゐる。

酒臺の向うの端に、ファット・ジョーが立つてゐる。この酒場の亭主で、恐ろしく腹の膨れた、粗野な巨大な體軀の男である。顔は、赤くて膨れあがつてゐて、豚のやうな小さい眼は、殆んど脂肪のうねりで隠れてゐる。大きい手の太い指には、安っぽい指輪を澤山嵌め、金の時計の鎖が鑑綱のやうに市松模様のチョッキに横にかけてゐる。

前方の卓の一つに、肩の圓い若い男が一人坐つて、卷煙草を吹かしてゐる。顏は煉粉のやうで、口は弱々しく、眼は意地惡い殘酷な色を帶びてゐる。みすぼらしい服を著てゐる。それは以前は安つぽいが見かけのいゝものであつたに違ひない。頭卷をつけ、鍔の無い帽子をかぶつてゐる。

夜の九時頃である。

ジョー　（欠伸をしながら）畜生。今夜はどうしてかう客が來ねえんだ。一體どうしたのか、譯がわからねえや。まるで墓場のやうだ。船員の奴等、みんな何處にゐやがるのか、分るといいんだが。（聲を高くして）よう。ニック。（ニックは冷淡に振りむく）何て言ふんだい。丁度お晝つ頃、あの下の船渠（ドック）に著いた船の名は。

ニック　（簡單に）グレンケエアンつて言ふんだ——ビュネゼリイ（ポウナ・ゼアリズ）から來たんだ。

ジョー　船員の奴等、給料はまだ貰はねえのかい。

ニック　今日のお晝過ぎに貰つたつて言つてたぜ。おらあ、船へ行つて、あいつ等に會つて來たんだ。おめえのところの名刺は渡して來たぜ。あいつ等、今夜間違えなく來るつて言つてた——用事が濟み次第に。

ジョー　二年間の給料を貰ふ奴あ、何人ゐるんだい。

ニック　四人だ——三人が英吉利人で、一人は間抜け野郎だ。

ジョー　（ぶり〳〵して）てめえ、船へ一寸行つて、名刺をおいて來たばかりぢやないか。あいつ等を此處へ連れこむお禮は、ちやんとてめえに拂つてゐるんだぜ。

ニック　（ぶつ〳〵言ひながら）ふん、大したお禮だ。おらあ、野郎を探して町中をほつつき廻るのが役目ぢやねえんだからなあ。さうぢやねえか。

ジョー　おらあ自分の事ばかり言つてるんぢやねえんだぜ。おらあ、何時でもてめえに、ちやんとした分前は、立派に呉れてるぢやねえか。

ニック　（冷笑して）さうさ——呉れなきやならねえからさ。

ジョー　呉れなきやならねえつて？　ふん聞いてみるがいいや。てめえのやうな仕事をや

りたがつてる奴あ、たんとあるんだぜ。

ニック　さうだらうよ。巡査がおれを誘拐罪で忌々しい監獄へぶちこみたがるのは、あれ

あ一體どうしてだい。

ジョー　（むつとして）おれ達あ誘拐なんかしてやしねえぢやないか。

ニック　（厭味に）ふん。まるでやらねえつて言ふのか。

ジョー　（一寸當惑して）そりやたまにあ、ちよいとはやらないぢやねえ。當り前の商賣がねえ時は。（當惑してゐるのを隠さうとして、ぶり〳〵しながら女給の方へ振り向く。彼女は、胸に顎をあて、半分眠りながら、まだ雑巾をかけてゐる）よう。あまつちよ。もう澤山だよ。てめえはまる一時間も、雑巾がけ、雑巾がけ、雑巾がけばかりしてやがらあ。客のねえ酒場を。もう止めろ。てめえのやることを見てゐると、全く身慄ひがすらあ。

マッグ　（鼻聲になり始めながら）お前さんが呶鳴ると、吃驚するぢやないか。ジョー。あたし悪い女ぢやないわ。悪い女ぢや……。お前さんのためにあ、出來るだけのことをしようとしてゐるぢやないの。

急に劇しく啜泣く。

ジョー　（荒つぽく）駄駄をこねるのは止せやい。もう止めろい。

ニック　（くす〳〵笑つて）あいつあ酔つぱらつてるんだよ。ジョー。どうだい、火酒を飲んだんだらう。マッグ。

マッグ　（突然泣き止んで、火のやうに怒つてニックの方へ振り向く）この小蟹め。後で、猿轡を嵌めてやるぞ。ちつとだつてお前の邪魔をしない正直な女にむかつて、そんな見つともない口を明けて、餘計なお喋りをしやがつて。（再び啜泣きを始めて）あたしが、氣分が悪くて仕事が出來ないからつて、まるで犬のやうに口穢く言ふなんて。

ジョー　よう、あつちへ行つてろ。二階へあがつて、寢てるんだ。用があつたら起してやるから。二階へ上つたら、あまつちよを二人起してくれ。もう九時半過きで、客の來る時だつて、さう言ふんだぜ。分つたかい。

マッグ　（酒臺の周りをよろ〳〵して左手の戸口のところへ行き——啜泣きながら）ええ、ええ、分つてよ。あたしなんさあ、どんなになるのか分りやしない。あたし病氣なんだもの。

あたしが死んだつて、お前さん、かまつてくれやしないだらう。

出てゆく。

ジョー　（ニックの勧めの足りないのをまだ苦にしながら――暫く間を置いて）四人の野郎、二年間の給料を貰つて、ポケットを金貨で一杯にしてゐやがるんだ――そいつを、てめえ取り逃しあがつたんだ。

哀しさうに頭を振る。

ニック　（氣短かに）止せよ。あいつ等屹度來るつて約束したんだ。間違はねえ。ちきにやつて來るだらうよ。まだ時間がうんとあるぢやねえか。（聲を落して）例の滴し藥は持つてるかい。多分要るだらうと思ふんだが。

ジョー　（酒壺の後から小さい壜を取り出して）おう。此處にあるぜ。

ニック　（滿足して）有難え。（意地惡い眼で探るやうに部屋を覗き廻す。それから手招でジョーを呼ぶ。ジョーは卓の傍に來て、腰を下ろす）おめえに滴し藥のことを訊いた譯あ、實過ぎにアミンドラ號の船長に會つたからだ。

ジョー　アミンドラ號つて言ふと？　どんな船だい。

ニック　帆前船の商船だ――帆柱のいやにひよろ長い――すつかり艤裝をした――白く塗りあがつた船だ――一月間、あの上の船渠に碇泊してるんだ。知つてるだらう。

ジョー　あゝ、さうか。今思ひ出した。

ニック　その船長が、是非野郎を一人欲しいつて言ふんだ。あいつ等、あしたの夜明に出帆するんだ。

ジョー　船に傭はれるのを待つてる連中が、澤山ゐると思ふがなあ。

ニック　だが、あの船ぢや、誰も行きやしめえ。船長や運轉手は、まるで忌々しい奴隷監視人だ。あいつ等あホオン岬を廻つてゆく事になつてるんだ。今度こゝへ來る航海ぢゃ船員の奴らを半分も餓ゑ死にさせやがつたんだ。だから、誰一人、あの船へ乘らうつて奴あゐやしねえんだ。（間）おらあ船長に固く約束したんだ。今夜、誰か一人連れてゆかうつて。

ジョー　（訝るやうに）お前、どうして連れてゆくつもりだい。

ニック　（目配せして）グレンケエアンの野郎を一人どうかと思ふんだ――あいつらあ給料を貰つて、此處へやつて來るから。

ジョー　（にやりとして）そいつあ、うめえ椋鳥だ。違えねえ。（眉を顰めて）もし、あいつ等が此處へ遣つて來たら。

ニック　遣つて來りや、へべれけに酔つぱらふだらう。まあ待つて見てゐろ。（聲高い、騒がしい歌ひ聲が往來から聞える）ほう、あいつ等の聲のやうだ。（往來の戸を明けて、外を眺めろ）畜生、あの四人の奴で無えつてことあるもんか。（勝ち誇つたやうにジョーの方を向き）よう、どうだい。あいつ等この場所を捜してるんだ。行つて、教へてやらう。

出てゆく。

ジョーは酒臺の後へ行き、お世辭たつぷりの微笑を浮べてゐる。

暫くして、戸が明いて、ドゥリスコル、コッキイ、イヴァン、オルスンが這入つて來る。

ドゥリスコルは、背の高い力强いアイルランド人である。コッキイは疎らな灰色の口髭のある、しなびた小男である。イヴァンは、無骨な百姓。オルスンは、圓い子供のやうな靑い眼の、すんぐりした中年の瑞典人である。初めの三人はすつかり酔つぱらつてゐて、特にイヴァンの如きは、やつと歩ける位である。オルスンはすつかり素面である。一同仕立のまづい上陸著を著、著心地が惡さうである。ドゥリスコルは堅いカラアの釦を外してゐる。カラアの端は側へ突き出てゐる。彼はネクタイを無くしてゐる。

ニックが一同の後から、こそ〳〵と部屋にはひつて來て、後方の卓に坐る。

ジョー　（心にもないお愛嬌をふりまいて）よう、萬歲。船員諸君。無事息災で歸つたのは何よりだ。

ドゥリスコル　（一寸體を搖すりながら、振り向いて、酒臺越しに彼の顏を覗き込む）おめえか。さう言つてくれるのは。（彼は見覺えがあるやうな風にあたりを見廻す）いつかの、忌々しい魔窟だな、慥かに。覺えがあるぜ。たしか五六年前に、ここで俺が眠りこんでる間に、鐵一文殘さず剝ぎ取られたんだ。（突然激怒して）畜生、くたばつちまへ。てめえのところの犬が、同じ惡戲をやりあがつたら承知しねえぞ。今度こそあ――

ジョーの方へ拳を振る。

ジョー　（周章てゝ遮つて）そりやお前さんの感違ひだ。こゝあ、そんな曖昧なところぢや

ねえんだ。

コッキイ　（嘲笑して）よう、さうだらうつて。てめえは天使だよ。

イヴァン　（何と言ふ事無しに圓頂の山高帽を脱ぎ、又かぶりながら――哀れっぽく）おらあ、こんな處は厭だ。

ドゥリスコル　（酒臺の方へ行き――つい今し方怒ってゐたのに、今度は優しく）よう。何でもねえよ。そんな事あみんな昔のこつた。おらあ忘れつちまつたぜ。おらあ、上陸した最初の晩から、くよくよするやうな男ぢやねえんだ。さあ、貴族のやうに酔っぱらはしてくれ。（手を差し出す。ジョーはそれを用心しながら握る）おいらあみんな一杯やるからな。三人にはウキスキイだ――アイリッシ・ウキスキイだ。

コッキイ　（嘲笑的に）それから、ジンヂヤビーヤが一杯だ。ここにゐる忌々しい父無し兒には。

拇指をオルスの方へつきつける。

オルスン　（にやりと人の好い笑を漏して）今夜は一度だけ、いい兒になるよ。

ドゥリスコル　（吼えながら、ジョーが卓に酒を持って來た時にニックを指差しながら）おい、あの若僧の誘拐者は何を欲しがつてゐやがるんだ――おい、いいやうに取つてくれ。

ポケットから金貨を取り出して、ぱたりと音をさせて酒臺の上に置く。

ニック　ビールを一パイント（わが三合弱）くんねえか。ジョー。

ジョーはビールを注ぎ、それを酒臺の向う端に置く。

ニックはそれを受取るためにその方へ行く。

ジョーは意味ありげな目配せをして、左手の戸の方を顎でさす。ニックは判つたといふ合圖を返す。

コッキイ　（酒を手にしながら――性急に）ひどく喉が渴きあがらあ。（盃をドゥリスコルの方に擧げて）萬歲。よう。萬歲。

ドゥリスコル　（釣錢を見ないで、ポケットに入れながら）さあ乾盃だ。水夫長の畜生、地獄の火焙りになるがいい。

飲む。

コッキイ　さうだ、さうだ。あんな野郎、盲になつちまへ。
盃を乾す。

イヴァン　（半分眠りながら）それがいいや。
ぐつと一呑に酒を呷る。
オルスンはジンヂャビーヤを啜つてゐる。
ニックは、自分のビールを飲んでしまふと、酒壜の前を廻つて左手の戸から出てゆく。

コッキイ　（金貨を一つ取り出して）よう、此處に置くぜ。肥つちよ。お代りだ。

ジョー　同じのかい。船員。

コッキイ　さうだ。

ドゥリスコル　さうぢやねえや。小人。おらあビールを一パイント貰ふんだ。喉がまるで石灰窯のやうに渇きやがる。

イヴァン　（突然、酔つぱらつてふら〳〵しながら立ち上つて、殆んど卓を覆しさうにする）おらあ、こんな處は厭だ。娘つ子が見てえんだ——大勢の娘つ子が。（感傷的に）おらあこんな處は厭だ。娘つ子と踊りてえんだ。

ドゥリスコル　（どしんと椅子に坐らせる）默つてろ。この露西亞の狒々め。てめえ、そんな容子で伊達なロメオになりてえんだらう。
イヴァンは泣きながらとりとめの無い不服を並べる——それから急に眠りこむ。

ジョー　（酒を持つて來て——オルスンを見て）お前さんも、船乘かい。

オルスン　（頭を振つて）有難うよ。今度はさうぢやねえ。

コッキイ　（嘲笑するやうに）こいつぁ金を貯めあがつたんだ。これから、故里のお母のところへかへるんだ。立派な田畑でも買つて、土でもいぢくらうつてのが、こいつの魂膽さ。（胸糞惡さうに唾を吐いて）船乘の癖に可笑しな野郎さ。畜生。

オルスン　（同じやうににやりと人の好い笑をして）おらあそれが好きなんだ。コッキイ。おらあ子供の時分にや、長え間野良仕事をしてゐたんだ。

ドゥリスコル　うつちやらかしておけよ。てめえ、蟲のやうな奴だなあ。おいらのやうな忌々しい馬鹿よりは、何か考のある野郎を見てるのは、氣持のいいこつちやねえか。お

らあお母が生きててくれたらと思ふぜ。おれを呼んでくれるお母が。さうすれあ、こんな惡魔の孔みてえな處で、醉つぱらつてやしめえよ。

コッキイ　（哀しさうに泣き始めながら）おう、ドゥリスク。そんな話は止してくれ。おらあ何だか辛くて、とても聞いちやゐられねえ。おれにあ、お母なんてありやしねえんだ。お母なんて——。

ドゥリスコル　默つてろ。猿め。止せやい、そんなにきいきい言ふのは。てめえ、そのでかい赤鼻の、すつかり瘤になつて捩ぢ上つてる、みつともねえ面を見たら、これから一生涯、涙なんか流さねえだらう。（嗤るやうに歌を怒鳴る）勇んで戰へる、我等ヴェックスフオドの男子。（普通の話聲になり）アルスタアなんか潰れてしまへ。（彼は飲む。他の者はそれに倣ふ）このロンドンの街で、この乾盃に贊成しねえ野郎は、裸に剝ぎむいてくれるんだ。

彼は物凄くジョーを見詰める。ジョーは直に自分のビールを注ぐ。

ニックが再び左手の戸からはひつて來て、ジョーの處へ行き、その耳元に何か囁く。ジョーは滿足さうに頷く。

ドゥリスコル　（彼等を睨みつけて）やい畜生。一體今、何を惡企しやがつたんだ。てめえたち二人は。（頑丈な拳を振りあげて）正々堂々とやれ。でなきや、おれの相手になるがいい。

ジョー　（周章てゝ）いや、惡企ぢやねえ。船員。それが嘘なら、殺されたつて構はねえ。

ニック　（斜をかいてゐるイヴァンを指差して）そこにゐるおめえさんの仲間が、娘つ子のことを訊いてたから、おらあ考へたんだ、屹度、娘つ子に來てお酌でもして貰ひたいんだらうと。

ジョー　（作り笑で合圖して）綺麗な可愛いい娘つ子だ。さうだなあ。ニック。

ニック　さうだとも。

コッキイ　おい。てめえの言ふ娘つ子つてのは、おれにあ大概分つてるよ。あいつ等、てめえたちを盲にしたんだ。見つともねえ奴なんだらう。まあ、肥つちよの亭主。てめえたちの讃める娘つ子にあ用はねえよ。おれとドゥリスクは、いゝ處を知つてるんだ。さうだつたな。ドゥリスク。

ドゥリスコル　違えねえ。おいらぢき後で、そこへ行くつもりだ。そこぢや音樂もありや野郎を元氣づける一寸した踊もあるんだ。

ジョー　ニック、おめえ一曲彈けるだらう。どうだ。ニック。

ニック　うん。やれるよ。

ジョー　そしたら、おめえさんたちは隣りの部屋で踊をやるといゝんだ。

ドゥリスコル　おい！　今のはその話なんだな。

二人の女、フレェダァとケイトとが、左手からはひつて來る。

フレェダァは小柄な、青白い顏の、金髮の女。ケイトは頑強で色が黑い。

コッキイ　（大聲でドゥリスコルに傍白する）畜生。見てみろ。あの情ねえ態つたら。女達は出來るだけの笑顏をつくりながら、卓の方へやつて來る。

フレェダァ　（苛々するやうな聲で）よう。船員さん。

ケイト　好い航海だつたかい。

ドゥリスコル　まるでひどかつた。だが、そんな事あどうでもいゝや。よく來た。まあ坐つて、何でも欲しい飲み物があつたら貰ふがいゝや。（ケイトに）おい、おれの傍へ坐れよ。可愛いゝ奴――お前、何て名だい。

ケイト　（にやりと馬鹿な笑をして）ケイトつてのよ。

彼の椅子の傍に立つてゐる。

ドゥリスコル　（彼女の體に腕を卷きながら）いゝアイルランド名前だな。だが、おめえのその體つきぢあ、忌々しい事だが、英吉利人だな。だが、そんな事あどうだつていゝや。可愛いゝケチイ、よく肥つてるな。おらあ、がさ〳〵皮許りの女は我慢がならねえんだ。

（フレェダァは惡意のある眼で彼をぢろりと見て、オルスンの傍に坐る）てめえ、何か欲しいのか。

オルスン　要らねえよ。ドゥリスク。こいつあ、おれのもんだ。

内衣兜から紙幣の束を取り出して、卓の上に一枚置く。

ジョーやニックや女達は、貪欲の眼付で、その金を見る。イヴァンは特別にひどい鼾をかく。

フレェダァ　お前さんの友達を起しておくれ。畜生。あたし、鼾聲ときちやぞつとするんだよ。

ドゥリスコル　（素早く身を動かして、イヴァンの耳に掩ひかぶさつてゐる山高帽を打つ）　よう、聞いたか。御婦人がてめえの事を話してるんだぜ。この露西亞ののろまめ。（それに答へるのは唯鼾だけである。ドゥリスコルは山高帽の破れたのを、イヴァンの頭から引ったくつて、又、打ちかへす）起きあがつて、目を醒せ。酔つぱらひの豚め。

又鼾聲。

女達はげらげら笑ふ。

ドゥリスコルは盃に殘つたビールをイヴァンの顔にぶっかける。露西亞人は忽ち何か早口に言ふ。どつと笑聲が起る。

イヴァン　（怒つて）おい――そんな事はおれあ嫌だ。

コッキイ　ビールを無駄使ひするなよ。ドゥリスク。

イヴァン　（不平を鳴らしながら）よう――そんな事あいけねえつて言つてるぢやねえか。

ドゥリスコル　そりやおいらの知つた事ぢやねえや。イヴァン。てめえ、娘つ子に會ひたいつて唸つてたんだぜ。そのくせ娘つ子がやつて來ると、てめえ豚小舍の豚のやうに喉を鳴らしてゐやがるんだ。てめえ、禮儀つてものを知らねえのかい。

イヴァンは初めて女達を見たらしく、にやりと間抜けた笑をする。

ケイト　（彼を見て笑ひながら）よう、よう。お仲間さん。お前さん露西亞人なの。

イヴァン　（ひどく嬉しがつて――ポケットに手を突っ込んで）一杯買はうぜ。

オルスン　駄目だよ。おれと約束があるんだ。（ジョーに）おう、注いでくれ。亭主。

ジョー　何にするんだい。ケイト。

ケイト　ジンよ。

フレェダァ　あたしブランデイよ。

ドゥリスコル　それから、おいらにやアイリッシ・ウキスキイだ――氣の毒に、この酒を飲まねえ方は別だぜ。

フレェダァ　（オルスンに）お前さん、飲まないのかい。

オルスン　（少し恥しさうにして）うん、飲まねえ。

フレェダァ　（蠱惑的な微笑をして）あたし、お前さんを咎めあしないわ。お前さん利口だわ。

あたしや、たまにはブランデイを一杯飲むんだよ、體のために。」

ジョーは酒と、オルスンの釣錢か持つて來る。

コッキイはよろ〳〵立ち上つて、盃を差し上げる。

コッキイ　さあ祝盃だ。お前たち御婦人のために。神様――（言ひかけて躊躇し――しぶ〳〵した調子で附け加へる）――この女達を祝福し給へ。

ケイト　（くつ〳〵馬鹿げた笑をして）まあ、さうぢやないんだらう。お前さんの言はうとした事あ。この惡者のコッキイ。

一同飲む。

ドゥリスコル　（ニックに）おい、おいらに約束した音樂は何處にあるんだ。

ニック　隣りの部屋に行けよ。さうすりや音樂があるよ。

ドゥリスコル　（立ち上つて）おい。皆の者。音樂を聞いて、踊らうぢやねえか。踊れねえ位に酔つぱらつてゐねえやうだつたら。

コッキイとイヴァンは足元がよろ〳〵する。イヴァンは殆んど立つ事が出來ない。彼は曖昧たらしい眼付でケイトを見て、煮識朦朧とした樣子で一人でくつ〳〵笑ふ。

三人は、ニックに導かれて左手の戸口から出てゆく。

ケイトがその後に跟いてゆく。

オルスンとフレェダァは坐つた儘、後に殘つてゐる。

コッキイ　（肩越しに呼ぶ）おい、來て踊れよ。オリイ。

オルスン　おう、行くとも。

立ち上らうとする。

隣室から、手風琴の音が響いてくる。續いてドゥリスコルの騒がしい叫聲。更に、足踏みする重重しい音。

フレェダァ　よう、あすこへ行つちやいけないわ。此處にゐて、あたしと話をしておくれ。みんな酔つぱらつてるが、お前さんは酔つちやゐないんだ。（彼の顔を覗きこむやうに笑ひかけて）お前さん、あすこへ行くんなら、あたしを好いちやくれないんだと思ふよ。

オルスン　（當惑して）そりやおめえの思違ひだ。フレェダァ。そんな事ありやしねえ――おらあほんたうにお前が好きだ。

フレェダァ　（微笑して――卓の上の彼の手の上に自分の手を置いて）あたしもお前さんが好きよ。お前さんは紳士だわ。お前さん、酔つぱらひもしなけれあ、こんな情ない不仕合な生涯の、つまらない女を蔑みもしないんだもの。

オルスン　（喜んだが、然し一層當惑して――足を踏さながら）おらあよく酔つぱらふんだぜ。フレェダァ。

フレェダァ　ちや、どうして今は飲まないのさ。（素早く何か尋ねるやうな眼差をジョーと取りかはす。ジョーは合圖を仕返す――それから彼女は説きつけるやうに話し續ける　何かお前さんの身の上話でも話しておくれ。

オルスン　（にやりとして）話すやうなことあ何にもありやしねえや。フレェダァ。おらあ下らねえ船乗りさ。それだけの事さ。

フレェダァ　何處で生れたの――ノオーウエかい。（オルスン頭を振る）デンマアクかい。

オルスン　違ふ。もう一遍言つてみな。

フレェダァ　ちや、屹度スエデンだわ。

オルスン　さうだ、さうだ。おらあストックホルムで生れたんだ。

フレェダァ　（さも嬉しさうなふりをして）まあ、可笑しいぢやあないの。あたしもそこで生れたんだよ――ストックホルムで。

オルスン　（驚いて）お前、スエデン生れかい。

フレェダァ　さうよ。お前さん、さうは思はなかつたの。でも、ほんたうに嘘ぢやないんだよ。

嬉しさうに兩手を拍つ。

オルスン　（すつかり歡んで）スエデン語が話せるかい。

フレェダァ　（哀しさうに、微笑しようと勉めながら）今かい。あたしの仲間のものがみんな、この英吉利へ來た時は、あたしまだほんの赤ん坊だつたのさ。それに、あたしが大きくなつて、もの覺えがつくやうになつた時分には、みんなは英語を話してゐたんだもの。だから、あたしスエデン語はとうと知らずじまひよ。（哀しさうに）あたし、知つてたらと思ふわ。（微笑して）知つてたら、お前さんと二人で、きやつ〳〵樂しく喋るんだつた

わね。

オルスン　昔住んでたところの古い話を聞くのはいゝもんだぜ。

フレェダァ　さうだわ。ほんたうに故里ほどいゝ處はありやしないわ。お前さん、ストックホルムへ行くつもりかい——船の出る前に。

オルスン　行くとも。おらあ此處からぢきにストックホルムへ歸るんだ。（誇らかに）旅行者になつてな。

フレェダァ　ぢや、お前さん暫く遊んだら、又、あすこで他の船に乘るんだらうね。

オルスン　乘るもんか。おらあ船にやもう二度と再び乘りやしねえよ。おらあ海はこれでもう澤山だ——僅かの端た金でそりやひどく働いた。船では、働いて、働いて、働き續けた。もう眞つ平だ。

フレェダァ　まあ、さうなの。だから、お前さん、お酒を止めてるんだね。

オルスン　さうなんだ。（にやりとして）おらあ酒を飲むと、すつかりへべれけになつて、有金を殘らず使ひ果してしまふんだ。

フレェダァ　でも、お前さんもう船乘にならないんなら、これから何をするの。お前さん、死ぬまで船乘でゐるんぢやなかつたのかい。

オルスン　いや、さうぢやねえ。おらあ十八の時まで百姓をやつてたんだ。おらあ、それが好きなんだ——いゝもんだぜ——野良で働くのは。

フレェダァ　でも、ストックホルムはロンドンと同じやうに街ぢやないのかい。一體、そこに農場なんてあるのかい。

オルスン　なに、ストックホルムから少し離れた農場に——おれの家があるんだ——阿父はもう死んでしまつたが——兄貴とお母が住んでゐる。今ぢあ、おらあどつさり金を持つてゐる。おらあ二年間の給料を懐にして歸るんだ。もつと土地を買ふんだ。そして、畠で働くんだ。（にやりしながら）もう緣が切れたんだ。海にも。けちな食物にも。暴風にも。——もう樂しい仕事だけだ。

フレェダァ　まあ、素敵ぢやないの。それに、お前さん結婚するんだらうね。

オルスン　（ひどく困惑して）そりや分らねえ。だが、いゝ女がありや、結婚するつもりだ。

フレェダァ　お前さん、ストックホルムに歸りや、いゝ女があるんぢやないの。屹度さうだわ。

オルスン　そんなことああるもんか。おらあ、船乗になる前には、いゝ女のあつた事もあつた、だが、おらあ船乗になつたきり、歸つて來ねえので、あいつあ外の男と結婚したんだ。

にやりと極まり惡さうに笑ふ。

フレェダァ　どの道、お前さん、國へかへるのはうれしいだらうね。

オルスン　うん。さう思ふよ。

左の部屋から凄まじい音がして、突然音樂が止む。間も無く、コッキイとドゥリスマルとがイヴァンの硬ばつた體を支へながら、出てくる。彼は、酩酊の最後の狀態に陷つて、びくとも動く事が出來ないのである。ニックがその後に跟いて來て、正面の卓に腰を下ろす。

ドゥリスコル　（彼等が千鳥足で酒臺のところまで來た時に）どうもお陀佛らしいぞ。まるで死骸のやうに、ぐにやぐにやしてゐやがらあ。

コッキイ　（ぶつと息を吹いて）畜生、まるで輕いや。

ドゥリスコル　（空いてゐる手でイヴァンの顏を打ちながら）起きろい。こん畜生。よう、起きろい。駄目だ、ガブリエルの喇叭だつて、こいつの眼を醒す事あ出來やしねえや。（ジョーに）一杯くんな。喉が渴いて息が切れさうだ。いやに骨が折れあがるな。

ジョー　ウヰスキイかい。

ドゥリスコル　アイリッシ・ウヰスキイだ。こののろまめ。

金貨を一枚酒臺に置く。ジョーはコッキイとドゥリスコルに酒を注ぐ。二人はそれを飲み、それから、足を踏み過つてよろ〳〵オルスンの卓の方へ行く。

オルスン　暫く坐つて、休めよ。ドゥリスク。

ドゥリスコル　そんな暇はねえや。オリイ。こいつを連れ歸つて、寢床にねかしてやらなくちや。若え奴が出かけて行くにや、もう夜が晩過ぎらあ。それに、あいつあすつかり醉つぱらつてゐるし、今日給料を貰つたばかりだ。あいつをこんな穴に信用して置いて行きやしねえや。（ジョーに向つて拳を振りあげて）よう、小僧つ子。おれにあ、てめえの魂膽が分つてるんだ。

ジョー　（哀しさうな容子をして）又、始めやがつた――正直な男を口汚なく罵しるなんて。

コッキイ　よう。あいつの言ひざまはどうだ。あいつの口をひつぱたいてやれ。ドゥリスク。

オルスン　（喧嘩になるのを防がうと氣を揉んで――立ち上りながら）イヴァンを下宿へ連れて行く手傳をしようか。

フレェダァ　（不服な樣子で）よう、お前さん、あたしを置いてきぼりにして行つちやいけないよ。面白い話をしてゐたんぢやないか。

ドゥリスコル　（目配をして）あの女が何か言つてるぜ。オリイ。てめえ、此處にゐた方がいゝよ。酒を飲まない色男。おいらにや手助なんか要りやしねえ。つい其處だし、醉つぱらつてゐたつて、强い野郎が二人ゐるんだ。なあに、こんな死骸みてえな奴を連れかへるのあ、大した骨折ぢやねえや。だが、ちよつと、戸を明けてくんねえか。オリイ。

（オルスンは戸口へ行つて、戸を明ける）行かうぜ。コッキイ。眠りこんぢやいけねえぜ。

（彼等はよろ〳〵戸口へ行く。彼等は出てゆく時、ドゥリスコルは肩越しに叫ぶ）ぢきに歸つて來るぜ。間違えなく。だから、てめえ、此處で待つてな。オリイ。

オルスン　承知だ。此處で待つてるぜ。ドゥリスク。

彼は心の定まらぬやうな樣子で戸口に立つてゐる。

ジョーは、フレェダァに彼を連れかへるようにと、劇しく合圖する。彼女は近寄つて、オルスンの肩に腕をまく。

ジョーはニックに酒壺の方に來るやうにと合圖をする。二人は昂奮しながら何かひそ〳〵話し合ふ。

フレェダァ　（蕩しこむやうに）お前さん、あたしを置いてきぼりにしやしないわね。可愛い人。（それから苛立だしく）後生だから、戸を締めておくれ。あたし霧にあふと、凍え死にしさうなんだよ。

オルスンは驚いて我に返り、戸を締める。

オルスン　（恐れ入つて）御免よ。フレェダァ。

フレェダァ　（彼を卓のところへ連れ歸り――咳をしながら）あたしに、ブランデイを貰つてくれないかい。あたし、ひどく寒氣がするんだ。

オルスン　よしよし。フレェダァ。お前の欲しいものを貰ふがいゝ。（まだ何か騷聲でニックに

指圖をしてゐるジョーに）おい、ジョー。フレェダァさんにブランデイだ。

彼は金貨が卓に置く。

ジョー　承知だ。（彼女の酒を注いで、卓に持つて來る）お前さんも少しあどうだい。船員。

オルスン　いや。おらあ駄目だ。（にやりと笑つて自分の盃を指差して）こいつあ水みてえなもんだがな。さうぢやねえかい。

笑ふ。

ジョー　（望を繋いで）どうだい。強い奴をやつちや。

オルスン　やりたいにややりてえんだが――まあ止さう。おらあ一杯飲めや、千杯も飲みたくなるんだ。

再び笑ふ。

フレェダァ　（ジョーが肱で悪意のある催促をやるので、それに應じて）よう。何かお飲みな。あたし一人ぢや、飲んだつてつまらないわ。

オルスン　ぢや、おれにジンヂャビーヤを少しくれ――少しだぜ。

ジョーは酒壺の後にゆき、ニックにオルスン等の卓の方に行くようにと合圖する。ニックは卓の方へ行つて立つてゐるので、オルスンには、ジョーが何をしてゐるか見えない。

ニック　（話しかける）おめえの仲間は何處へ行つたんだい。

ジョーは小さい壺の中味を、オルスンのジンヂャビーヤの盃に滴し込む。

オルスン　あいつ等、イヴァンを、あの酔つぱらつた野郎を、寢床へ連れてつたんだ。すぐに歸つて來るよ。

ジョーはオルスンの酒を卓に持つて來て、彼の前に置く。

ジョー　（ニックに――怒つて）よさねえか。ぐづ〳〵してゐる暇なんかねえんだぜ。おい。急いでやれよ。

ニック　心配するねえ。亭主。行つて來るぜ。

彼は、急いで戸口から出てゆく。ジョーは酒壺の後の自分の席に歸る。

オルスン　（暫く間――氣を揉みながら）おらあ、皆の後から行きやよかつたと思ふよ。コッキイも、ひどく酔つぱらつてたし、ドゥリスクだつて――

フレェダァ　なあに、あの大きいアイルランド人は大丈夫だわ。お前さん聞かなかつたのかい。間違ひなく歸つてくるから、お前さんに待つててくれつて言つてたのを。

オルスン　聞いたよ。だが、あいつ等ぢきに歸つて來なけりや、下宿にゐるかどうか、見にゆかなくちや。

フレェダァ　下宿つて何處にあるの。

オルスン　この往來から少しはひつたところだ。

フレェダァ　お前さんも、そこにゐるのかい。

オルスン　さうだよ――汽船がストックホルムへ出帆するまで――二日間は。

フレェダァ　（時々ジョーの方を見たり、オルスンが仲間の者の後を追うて行くのを忘れるやうに、オルスンに話し續けさせようと努めたりしてゐる）　お前さんの母さんは、お前さんを見たら、どんなに喜ぶだらうね。（オルスン微笑する）母さんは、お前さんの歸るのを知つてるのかい。

オルスン　いや、知らねえよ。おらあお母を吃驚さしてやらうと思つたんだ。おらあ、ボス・エレズから手紙を出したが、歸るのは知らせてやらなかつた。

フレェダァ　乾度年寄りだらうね。母さんと言ふのは。

オルスン　もう八十二だよ。（回想するやうに微笑む）よ、フレェダァ。おらあ隨分長え間、お母や兄貴に會はねえなあ――かうつと――（一生懸命に指折り數へて）もう十年以上にもなるに違えねえ。以前は時々手紙を出したもんだ。お母は度々寄越した。兄貴も寄越した。お母はどの手紙にも、ぢきに歸つて來いつて書いて來た。兄貴も同じやうに書いて寄越した。おれに野良仕事の手傳をしてほしいんだ。おらあ何時でも、ぢきに歸るつて返事を出した。おらあ何時でも、航海の終りには、家に歸る積りでゐたんだ。だが、上陸して一杯やると、滅茶苦茶に飲んで、すつかり醉つぱらつて、有り金をはたいてしまふんだ。そして、又、船に乘つて航海に出なけあいけなくなるんだ。だから今度はかう獨言してきたんだ――一滴も飲むなよ。オリイ。飲んだら又歸れなくなつてしまふんだよつて。おらあ、今度こそ歸りたいよ。何だかホームシックのやうだ。野良へかへつて、國の奴にも逢ひてえよ。（微笑し）まるで小さい子供のやうに、故里が戀しいや。だから今

夜は飲まねえんだよ――この不味いビールの外は。（子供のやうな笑聲で大きく笑ふ。それから急に真面目になる）よう、フレェダァ。お母は段々年がいくんだ。おらあお母に逢ひてえよ。もしかしたら、お母は死ぬかも知れねえ。さうしたらおらあ二度と――

フレェダァ　（我を忘れてひどく感動して）おお、そんな話はしないでおくれ。あたし、死ぬ話をされるのは大嫌ひなんだ。

往來に面した戸が明いて、ニックがはひつて來る。

その後へ、荒っぽい顔付の、みすぼらしい裝の男が二人跟いて來る。彼等は、頭卷をし、絲無し帽を目深かにかぶつてゐる。

彼等は戸口に一番近い卓に腰を下ろす。

ジョーが彼等にビールを三つ持つて來る。一同、オルスンの方へ幾度もちらと目を遣りながら、何かひそ〳〵と相談する。

オルスン　（立ち上らうとしながら――氣を揉み）おらあ下宿へ行つて來よう。ドゥリスクとコッキイに、何か間違ひでも起つたんぢやねえかしら。

フレェダァ　よう、行つちやいけないよ。あの人達あ自分で氣をつける事が出來るよ。赤ん坊ぢあないんだもの。もう暫く待つておいでよ。お前さん、まだ飲まないんだね。

ジョー　（急いで卓のところに來て、拇指を突出して正面にゐる連中を示して）あすこにゐる連中の一人が、おめえさんに一しよに飲んで貰ひたいつてよ。

フレェダァ　まあ、さう。（オルスンに）さあ、これを飲まうよ。（彼女は自分の盃を擧げる。オルスンも同じやうにする）さあ、お前さんの祝盃だ。見事な畠を手に入れて、末永く仕合せにお暮しよ。スコオル！　（乾盃の時の呼聲）

彼女はブランディを飲みほす。彼はジンヤビーヤを半分ばかり飲んで、顔を顰める。

オルスン　スコオル！

盃を下に置く。

フレェダァ　（憤つたやうに見かけて）お前さん、あたしの乾盃が氣に入らないのかい。

オルスン　（にや〳〵笑つて）そんな事ありやしねえ。親切あ有難う。フレェダァ。

フレェダァ　ぢや、あたしのやうにすつかりお飲みな。

オルスン　よし――（殘りをぐつと呑む）そらこの通りだ。

笑ふ。

フレヱダア　冗談のやうにおやりだね。

オルスン　（笑って）アミンドラ、萬歳。

ニック　（警戒するやうに）しいつ！

オルスン　（椅子に坐った儘振り向いて）アミンドラだって？　こゝに碇泊してゐるのかい。おらあ、ずつと前に一度、あの船に乗つた事がある——三本マストで、すつかり艤装をした、帆前船だらう。おめえの言つてるのは、その船だらう。

無賴漢　（にや〳〵笑って）さうだよ。おめえの言ふ通りだ。

オルスン　（怒って）おらあ、あの忌々しい船を知つてる——船らしい船であんなひでえ船つたらありあしねえ。腐つたやうな食物で、しよつちゆ休無しに働かせあがる——船長も運轉手も、ブルウノーズの野郎だ。少しでも事情を知つてる水夫なら、あんな船なんかに乗るもんか。あいつあ、此處から何處へ行くんだ。

無賴漢　ホオン岬を廻るんだ——夜明に出帆するんだ。

オルスン　べらぼうめ。可哀さうに、氣の毒な野郎どもだ。今頃ステイフ岬を廻つて航海するなんて。屹度、誰かは、二度と港につく事ああるめえよ。（彼は眩暈がするやうに、眼の上に手を横切らす、彼の聲は段々弱くなる）畜生、こいつあいけねえ。何だか眩暈があがらあ。部屋中が、酔つぱらつた時のやうにぐるぐる廻りあがる。（力無く立ち上る）さよなら。フレヱダア。おらあ病氣のやうだ。ドゥリスクに言つてくれ——おらあ家へかへつたつて。

一歩前に出ようとして、急に椅子の上に打つ倒れ、床に轉がり落ちて、その儘意識を失つて横たはつてゐる。

ジョー　（酒臺の後から）さあ、早くやれ！

ニックは駆け寄る。ジョーも後に續く。フレヱダアはもう既に意識を失つた男の側に立つてゐて、彼の内衣嚢から金の束を取つて了ふ。こつそり手形を一枚抜き取つて、胸に押しこむ。彼女は自分の擧動を隠さうと努力したが、ジョーに見つけられる。彼女はジョーに金の束を手渡す。ジョーはそれをポケットに納ひこむ。ニックは他のポケットをすつかり捜して、一掴みの釣錢を卓の上に置く。

長い降りの船路

ジョー　（氣短かに）早くやれ。早くやれ。早くやらねえか。仲間の野郎がぢきに歸つて來るぢやねえか。（二人の無賴漢が傍へ來る）さあ。二人の者。こいつを、酔つぱらひのやうに、腕の中へ抱へこむんだ。（二人はその通りする）アミンドラへ連れてゆくんだ——船は分つてるだらう。え。——二つ上の船渠（ドック）だ。ニックが教へるだらう。ニック。船長がこいつの給料の前金を寄越す迄あ、あの忌々しい船を下りちやいけねえよ——一月分殘らず——金貨を五枚だ。分つたかい。

ニック　おらあ、自分のやる事あ心得てゐるよ。亭主。

彼等はオルスンを戸口の方へ支へて行く。

無賴漢　（彼等が出かける時に）この間抜け野郎、船の上で目を醒したら、とんだ吃驚をするだらう。

一同笑ふ。出て行つて戸が締る。

フレェダァは急いで左手の戸口へ行く。ジョーはそれを遮つて彼女を捉まへる。

ジョー　（威嚇しながら）寄越せ、おめえの取つたものを。

フレェダァ　取つたつて？　すつかりお前さんにやつたぢやないか。

ジョー　この嘘吐きめ！　こそ〳〵誤魔化しあがつたのを、見てゐたぞ。てめえ、ジョーを馬鹿に出來ると思つちや間違ひだぜ。そんな若僧（わかぞう）ぢやねえだぜ。（荒々しく）寄越さねえかつたら。この牝牛め。

彼女の腕を引つ摑む。

フレェダァ　放しておくれ。何も持つてやしないよ——

ジョー　（毒々しい樣子で彼女の顎の横側を打つ。彼女は床の上で、身を揉む）覺えてやがれ！

彼は腰を屈めて、彼女の胸を探り、手形を引き出し、滿足らしく喉を鳴らしてポケットに突つ込む。

ケイトが左手の戸を明けて覗きこむ。——それから、フレェダァの傍に駆け寄つて、彼女の頭を自分の胸に抱きあげる。

ケイト　（優しく）まあ、可哀さうに。（怒つてジョーの方を見ながら）又、打つたんだね、お前さんは。この卑劣な豚め。

ジョー　打つたとも。おめえも打つてくれるんだぞ。音無しく默つてゐなけあ。こいつを向うへ連れて行け。

ケイトはフレェダァを隣室へ連れてゆく。ジョーは酒壺の後に行く。
間も無く表の戸が明いて、ドゥリスコルとコッキイとがはひつて來る。

ドゥリスコル　行かうぜ。オリイ。（突然、其處にはオルスンの居ないのに氣付いて、ジョーに向つて）おい。あいつ何處へ行つたんだ。

ジョー　（意味ありげな瞬きをして）あれあフレェダァと一しよに五分ほど前に出かけて行つたぜ。うまくやつてるんだぜ。うまく。

ドゥリスコル　（にやりと笑つて）うん。さうなのか。そいつあ意外だ。畜生、あのオリイの奴、女と一しよに出かけるなんて。いゝ時だ。あいつあ素面だ。でなけあ、女に鐚一文殘さず卷きあげられらあ。（眠むさうに瞬きしてゐるコッキイの方を向いて）よう、どうした。小人。（ジョーに）おれにウヰスキイをくれ。アイリッシ・ウヰスキイを。

――幕――

鯨

人物

ベン　船ボーイ
賄方
キーニイ　船長
スロカム　二等運轉手
キーニイの妻
ジョー　魚叉を打つ男
捕鯨船「アトランテック・クイン」の水夫大勢

景

捕鯨蒸汽船「アトランテック・クイン」の船中にある船長キーニイの室――約八呎位の高さの、小さい正方形の部屋で、中央に船尾高甲板の方に開いてゐる天窓がある。左手（船の艫）に、粗末な布團のついた長椅子が一個壁に取附けてある。椅子の前に卓が一つ。椅子の上方には、カーテンを引いた舷窓が數個ある。

正面左に、船長の寢室に通ずる扉がある。扉の右に、眞新しいかのやうに見える小さいオルガンが、壁にくつつけて置いてある。

右手後方に、上部を大理石で飾つた食器棚。その棚の上には、女用の縫物の籠。その手前に、戸口。それは船室昇降口に、且つ高級船員室をよこぎって中甲板に、通じてゐる。

部屋の中央に煖爐。天井の中央からは釣ランプが懸けてある。船室の壁は凡て白く塗ってある。

船は少しも動揺してゐない。天窓から來る光は、弱々しく背縋めてゐて、海洋や空が死んだやうになつてゐる時の、穏かで灰色の日の一日であることを示してゐる。沈默は、頭上の船尾高甲板を歩き廻る誰かのこつこつと規則正しい足音の外は、掻き亂されない。

一八九五年の或日の午後の、二點鐘——一時——近くである。

幕が上ると、暫く、押し迫るやうな深い沈默。やがて、賄方が入つて來て、船長の中食後まだその儘になつてゐた皿を、卓から取り片付け始める。彼は、白髮まじりの老人で、ズックのズボンに、セータアに、耳隠しの附いた毛絲の帽子をつけてゐる。その擧動は、不愛想で怒つたやうである。立ち止つて皿を積みかさね、上方の天窓の方を目ざとくちらと見る。それから、爪先で正面の鎖してある扉に忍び寄つて、隙間に耳を立てて聞き入る。何か物音がしたので、顏を曇らせて、怒に充ちた兇を呟く。右手の扉から音がする。彼は卓の方へ跳び退る。

ペンが入つて來る。貧相な長い顏の、ませた、のろまらしい少年である。セータアや毛皮の帽子を著てゐる。寒さで齒をがたがた言はせながら、急いでストーヴの方へ行き、其處に、暫く、震へながら立つてゐ、兩手をふうふう吹いたり、側腹に敲きつけたりして、殆ど泣きさうな樣子である。

賄方　（ほつとした調子で——誰であるか見ながら）おゝお前かえ、え。何だつてそんなに震へてゐるんだ。お前の居場所のストーヴの傍に立つてろ。さうすりや、齒をがたがた言はすに及ばねえんだ。

ペン　さ、さ、さむいんだよ。（齒のがたがた言ふのを止めようと努めながら——嘲笑的に）誰だと思つたんだね——爺さん。

賄方　（威嚇するやうな風をする——ペン縮みこむ）默つてろ。若えの。默つてゐねえと、後が怖いぞ。（いくらか親切に）お前、しよつちう何處にゐたんだ——水夫部屋かい？

ペン　さうだよ。

賄方　お前、水夫たちと上へ上つて變な眞似でもするのを船長に見つかつてみろ。膽玉にしみる程ひつぱたかれるぞ。

ペン　うん、船長は何にも見てゐやしねえや。（調子に怖るやうな風がある——彼は上方をちらと見て）あつちへ行つたりこつちへ行つたりしてゐる丈で、誰にも氣がつかないやうだ——そして、北の方の氷をぢつと見詰めてゐるよ。

賄方　（同じやうに憚るやうな調子がその壁に入りこんでゐる）あいつあ、何時だつて氷を見詰めてゐるんだ。（突然怒つて、天窓の方へ拳を振りながら）氷、氷、氷！　畜生！　あいつもあいつだ。氷も氷だ。一年近くも俺達を閉ぢこめあがる——目にはいるものと言つちや、氷ばかりだ——糖蜜の中の蠅のやうに、氷の中に閉ぢこめあがる！

ペン　（心配さうに）しいつ！　聞えるぞ。

賄方　（怒りながら）さうだ、畜生、忌々しい、あいつもあいつだ、北極海も北極海だ、あいつの下らねえ捕鯨船も捕鯨船だ、こんな船に乘りこんでる馬鹿な俺も俺だ。（この憤激の無益なのが氣付いたかのやうに靜かになる——頭をふり——ゆつくりと、深く信じるやうに）あいつはひでえ奴だ——船乘であんなひでえ奴つたらありやしねえ。

ペン　（眞面目くさつて）さうだとも。

賄方　俺達が雇はれるやうに契約した二年間は、今日で終るんだ。有難え！　この二年間は犬のやうな生活さ。一度だつて、すばらしい獵があるぢやねえし、おまけに、下等な腐つたやうな食物で、兩手は半分餓ゑ死してゐやがらあ。それに、國にかへるやうな容子があいつにあちつとだつてねえんだ！　（苦々しく）內地！　俺はもう一度、地面に足を載つけることが出來るかどうかさへ氣になつて來たよ。（昂奮しながら）あいつは一體何をやらうと考へてるんだ。俺達をこんな處に閉ぢこめあがつて、揚句の果が、一生を使ひ果して、一人殘らず餓ゑ死するか凍え死するのが關の山だ。今度船を出さなきや、歸りの航海を續けてゆくだけの食物も危くなるんだ。皆は、何をやらうと目論んでゐるんだ。お前、水夫部屋でどんな話を聞いた？

ペン　（彼に近寄り——囁聲で）今日かへるやうに船を南へ向けなけあ、暴動を起すつて言つてたよ。

賄方　（凄い滿足の表情で）暴動？　さうだ。皆にとつちや、さうするより外しやうがねえんだ。いい仕返しだ——皆をまるで犬のやうに取扱ふあいつには。

ペン　南の方はすつかり氷が開いたよ。目に見えるのは何處も綺麗な水だ。船を返さねえ理由はあるめえつて、皆言つてるよ。

賄方　（苦々しく）然し、あいつの見たがるのは、氷きや目にはいらない北の方許りだ。綺

麗な水なんて見たがるもんか。あいつの考へてるのは、鯨を獲ることだけだ——運よく鯨が獲れないからつて、俺達のせゐのやうに考へてゐやがらあ。（頭を振つて）あいつ、どうやら正氣を失ひかけてゐるやうだぜ。

ペン　（畏れて）お前、船長が氣が變だと、ほんたうに思ふのかい。

賄方　さうさ。神様があいつにお與へになつた罰さ。あいつのしてゐるやうな事をして、氣の狂はねえ奴なんて、お前、知つてるかい。（正面の扉を指して）氣の狂つてるものでなけあ、誰が女房なんか連れて來るもんか——あんな綺麗な女をよ——下らねえ捕鯨船なんかに載せて、一年近え間、下らない氷ばかりで閉ぢこめられてゐる北極海くんだりへさ。あの女は、一生涯生氣を失ふかもしれねえぜ——あの女は慥に二度とあ、もとのやうにはなれやしねえぜ。

ペン　（哀しさうに）あの女はもとは俺にはいつでも素晴らしく親切だつたがな——（眼は大きく駭いたやうになる）あの女は——あんなになつちまつた。

賄方　さうよ。俺たちの誰にだつて親切だつた。あの女がゐなけりあ、船の中は地獄になつてゐただらうよ。あいつときちやひでえ男だ——ひでえ、ひでえ男だ——まるで駆者みてえな男だからな。（凄く笑ひ）あんな奴は、女房を追ひ使つて氣違にでもしたら——初めて氣が安まるだらうよ。氣が狂つたつて、あの女の罪なもんか。船中の者が、すつかり氣が狂はねえのが不思議な位だ——しよつちゆこんな忌々しい氷や、自分の聲を耳にするのさへぞつとするやうな、ひつそりとひそまり返つた裡にゐてさ。

ペン　（右手の扉の方へ脅えたやうな一瞥を投げて）あの女はもう俺には話しかけてはくれない——まるで俺が分らねえといふ風に、俺を見るだけだ。

賄方　あの女には、誰も分らねえんだ——あいつの外は。話をする時は——あいつと話をする——それだけなんだ。

ペン　あの女は一日中、坐つて縫物してゐるきりだ——それから音も立てずに、一人で泣いてる位だ。俺はそれを見たんだ。

賄方　うん、俺はついさつき戸の隙間から聽耳したよ。

ペン　（爪先で扉に忍び寄り、耳を傾ける）今度は泣いてゐるよ。

賄方　（ぷりぷり怒って――拳を振りながら）あいつの魂が地獄へ落つこちればいいのに。あの悪魔が！

誰か船室の昇降口の階段をゆつくりと下る音がする。

賄方は急いで積みかさねた皿の方へゆく。彼はびくびく神經質になつてゐたので、一番上の皿を突き落す。皿は床に落ちて碎ける。彼は怖ろしさに慄へながら、氣を失つたやうに立つてゐる。

ペンは、ポケットから引き出した布で、オルガンを激しく擦つてゐる。

船長キーニイは、右手の戸口に姿を現はして、いつもやるやうに毛皮の帽子を脱ぎながら、部屋へはひつて來る。

彼は四十位の男で、背丈は六尺近くだが、肩と胸との巨大なために、いくらか低く見える。容貌は頑丈で、皺が深い。灰髯の青い、冷たい苦酷な色を帶びた眼。脣の薄い、固く緊つた口。厚い髮の毛は灰色で長い。厚い藍色のヂヤケットを著、藍色のズボンを船員用の長靴に押しこんでゐる。二等運轉手が、彼に跟いて船室へはひつて來る。風雨に曝された癖顔の、六尺男。彼は船長と同じやうな服裝である。三十そこそこの年恰好。

キーニイ　（賄方に近づき――彼の顔を睨みつける。賄方は明かに怖れた樣子で、顫へる兩手に、皿の積みかさねながたがた言はせながら立つてゐる。キーニイは拳を後にふり上げる。賄方は縮ん

がる。拳を次第に下げてキーニイは靜かに口を切る）蟲けらを打つやうなもんだ、おい、もう二點鐘近くぢやないか。賄。而もまだこれつぱしのものを取片づけてないんだ。

賄方　（吃りながら）そ、そうです。船長。

キーニイ　てめえ、自分の仕事をしないで、此處で、この小僧つ子と、昔の女の話でも喋つてゐたんだらう。（ペンに鋭く）出てゆけ！　海圖室を掃除しておけ。（ペンは運轉手の傍を通つて、開いてゐる戸口へ驅けてゆく）この皿をひろひ上げておけ。賄。

賄方　（もぢもぢしながら壞れた皿をひろひながら）はい。

キーニイ　今度皿を壞したら、繩の端に縛りつけて、ベーリング海へ突つ込んでくれるんだぞ。

賄方　（震へながら）はい。船長。

彼は急いで出てゆく。

運轉手はゆつくりと船長の方へ歩み寄る。

運轉手　あなたにお話したいと思ふ事を、舵手に聞かれたくはなかつたのです。ですから

此處へ來て頂いたやうな譯です。

キーニイ　（氣短かに）話し給へ。スロカム君。

運轉手　（思はず知らず聲を落しながら）周圍の樣子から考へると、どうも水夫どもが何か騒ぎを起さうとしてゐるらしいんです。あなたが船を返さなければ、どうもあいつ等の樣子が險惡になりさうなんです。どいつもこいつもなんです。契約の二年間は、今日限りなんです。

キーニイ　君の話す事は、俺には耳新しい事ぢやないんだ。スロカム君。ずつと前から、あいつ等の樣子で感付いてゐた。あいつ等の不穩な顏付と、澁々した働きぶりとが、俺には分らないと思ふかね。

正面の扉が明いて、キーニイの妻が戸口に立つてゐる。

彼女は、ほっそりとした、顏の美しい、小柄な女で、黑い衣裳をきちんと著てゐる。眼は泣腫らして赤くなつてゐ、顏は緊きつゞて背樞めてゐる。慴えたやうな眼差で部屋に入つて來て、名狀し難い恐怖でその場に釘付けされたかの樣に立つて、兩手を神經質に握つたり開いたりしてゐる。

二人は振り返つて、彼女を見る。

キーニイ　（荒っぽい親切さで）あ、アンニイか。

キーニイの妻　（夢から醒めたかのやうに）デェヴィド、あたし――（默りこむ）

運轉手は戸口の方へ行く。

キーニイ　（彼の方に振り向いて――鋭く）待ち給へ！

運轉手　はい。

キーニイ　アンニイ、お前何か欲しいのかい。

キーニイの妻　（暫く、自分の考を集中しようと努めてゐるかのやうに見える）あたし、あの――甲板へ行きたいのです。デェヴィド。新しい空氣を吸ひに。

彼の許しを待ちながらおとなしく立つてゐる。（彼と運轉手は意味のある眼付を交す）

キーニイ　ひどく寒いぜ。アンニイ。お前、今日は此處にゐた方がいいぜ。甲板へ出たつて、見るものは何にもありやしない――氷ばかりだ。

キーニイの妻　（一本調子で）それあ知つてゐます――氷、氷、氷！　でも、下のこの部屋では見るものと言つては、壁より外に何にもありあしないんですもの。

厭ふやうな身振をする。

キーニイ　オルガンを彈いたらどうだい。アンニイ。

キーニイの妻　（鈍く）オルガンは厭なんです。故里のことを想ひ出さすんですもの。

キーニイ　（少し憤慨した聲で）お前のために買つたんぢやないか。

キーニイの妻　（鈍く）それあ分つてゐます。（彼等から離れて、ゆつくりと左手の椅子の方へ歩いてゆく。一つの舷窓のカーテンを引いて覗く。そして、悅びの叫を擧げる）あ、水だ！　綺麗な水だ！　眼にはいる何處もかも！　この三月の間、氷ばかり見て來た後で、何て美しく見えるんでせう。（二人の方へ振り向く。顏は歡喜の色に變る）お、あたし今度こそ、甲板へ上つて、あれを見なければなりませんわ。デェヴィド。

キーニイ　（顏を顰めて）今日はいけない。アンニイ。太陽の輝く日を待つてた方がいいよ。

キーニイの妻　（絕望的に）でも、こんな怖ろしい處では、太陽の輝くことなんかありはしませんわ。

キーニイ　（命令するやうな調子で）今日は止した方がいい。アンニイ。

キーニイの妻　（この命令に屈して――意氣地なく）ぢや、ようございますわ。デェヴィド。

キーニイ　（鋭く）アンニイ！

キーニイの妻　（鈍く）ええ。デェヴィド。

キーニイ　スロカム君と相談しなきやならない用件があるんだ――船の用件が。

キーニイの妻　よございますわ。デェヴィド。

靜かに正面から去る。

彼女の後に扉が四分の三閉ぢられた儘になつてゐる。

キーニイ　あれは甲板には上げない方がいいやうだ、あいつ等が何か騷動を起さうとしてゐるやうだつたら。

運轉手　さうですとも。船長。

キーニイ　而もあいつ等、騷動を起さうとしてゐるんだ。俺は骨身にまでそれを感じてゐるんだ。（上衣のポケットから短銃を取り出して、檢べる）君も有つてるか。

運轉手　有つてます。

キーニイ　こんなものは使ふには及ぶまい――あいつ等はまるで犬のやうな根性だ――一寸嚇かしさへすれば澤山だ。（凄く）俺は今迄一度だつて使ふ必要に迫らない。而も、陸でも海でも、思ひ出してみてもよく騒動には出つくわしたもんだ。そして、死ぬ迄出あふだらうと思ふよ。

運轉手　（躊躇しながら）では、船を返さうとは――なさらないんですか。

キーニイ　船を返す！　一體この俺が、船艙にたかが鯨の四百樽位で、南の方へ歸つてゆくと思ふのか。

運轉手　（急いで）いや、そんなつもりぢや――でも、食物がだんだん減つてゆくんです。

キーニイ　氣をつけて取扱へば、まだ當分は十分やつてゆけるのだ。それに水がどつさりあるぢやないか。

運轉手　あいつ等、とても食へやしないつて言ふんです――殘つてゐるものでは。その上契約の二年間は今日でお終ひです。あいつ等は歸つてから、法廷でいさこさやらかすかもしれませんよ。

キーニイ　勝手にしあがれだ！　法廷へ持ち出すなら持ち出すがいいや。俺は金なんかどうだつていいんだ。俺は鯨を獲らなきやならねえんだ。（運轉手に鋭く目をやつて）こんな結構な裁判官になりたかないかね。スロカム君。

運轉手　（顏を赤くして）まあ、あんまりひどい事を見なけりや。

キーニイ　あの馬鹿な奴等、今頃何のために歸りたいと言ふんだ。四百樽位の分前ぢや、嚙煙草の代にもなりやしねえぢやないか。

運轉手　（靜かに）自分達の仲間や世間へかへりたいらしいんです。

キーニイ　（探ぐるやうな眼で彼を見ながら）君もやつぱり歸りたいかね。（運轉手は彼の鋭い凝視にまごついて眼を伏せる）嘘をつくな。君の眼に、ちやんとさう書いてある。（凄い厭味で）賴むぜ、スロカム君、あいつ等に加はつて俺に反抗しないやうに。

運轉手　（むつとして）そりやひどい。そんな事を言ふのは。

キーニイ　（滿足して）何、そんな事は大して氣にしちやゐないよ。トム。君は俺と十年近

くも一しよにゐるんだ、そして俺が捕鯨を敎へたんだ。假令、俺がひどい男であつても、誰だつて、俺をいい主人でないと言ふ事は出來ないんだ。

運轉手　俺は自分の事なんか考へてゐやしない——國へ歸りたいなんぞと。（絶望的に）然し、奥樣が——寒さや不漁や氷ばかりで惱まされて——こんな處で滿足してはゐられないやうに見えるんです。

キーニイ　（顏を曇らせ——叱りつけやうとしたが、いくらか穩に）そりやこつちの事だ。然し、さうはつきり言つてくれるのは有難い。（間）氷はすぐと北方へ開けるだらう。今日こそ氷の動き始めるのが見えるぜ。氷が動き出して、太陽が見えるなら、アンニイは元氣づいて來るんだ。（再び間——それから急に叫ぶ）北極海へ俺を牽きつけるのは、忌々しい目腐金ぢやないんだ。トム。俺にはたかが鯨の四百樽位持つて、ホームボートへ歸ることが出來ないんだ。死んだ方がましだ。何時だつて、船一杯に積みこまないで歸つたことがねえんだ。さうぢやないか。

運轉手　そりやさうです。然し、今度の航海は氷で閉ぢこめられ、その上——

キーニイ　（嘲笑するやうに）ふん、他の船長の誰がそんな事を信じるものか——俺が航海又航海ときり開いて來たのを。ティボットにしろ、ハリスにしろ、シムスにしろ、その他誰にしろ——俺を笑つたり嘲つたりするに違ひないんだ——ホームボートの誰もかれも、が、俺を嘲るに違ひないんだ。「あのデエブ・キーニイの奴、たかが鯨の四百樽位で歸つて來て、ホームボート一番の捕鯨の船長だと、どうして自慢出來るものか」つて。（この考でひどく昂奮する。食器棚の大理石の端に拳を打ちつける）畜生！　どうあつても鯨を捕らなけりやならない。この氷を、俺がどうすることが出來るもんか。此處へ來始めてから三十年この方こ、んなひどい事はありはしない。だが、今度こそ氷は開くよ。すつかり溶け去るのは、この一兩日の中だ。そして、此處は鯨で一杯になるんだ。さうだ、今度こそ間違はない。俺はまだ見間違ひした事はないんだ。俺は鯨を捕らなくちやならない。どんな目に會はうと、鯨を捕るんだ。捕るまではどうしたつて歸るもんか。

正面の扉から啜泣きを制へてゐる聲がする。

二人は耳を澄しながら、暫く立つてゐる。

キーニイが戸口へ行つて覗く。はひつたものかどうかと暫し躊躇ふ——それから靜かに戸を閉める。

魚叉を打つ男のジョーが、右手からはひつて來て、船長が自分に氣の付くのを待ちながら立つてゐる。凸凹のある險惡な顏の、巨大な六尺男である。

キーニイ　（振り返つて彼を見て）馬鹿のやうに立つてるぢやないぜ。何の用だ。

ジョー　（まごついて）俺達は——船長、皆の者が——あんたと相談する總代をよこしてえつて言ふんです。

キーニイ　（荒々しく）來るやうにつて言へ——（自分を制へて、然し、相變らずむつちりとして）來いつて言へ。會つてやらう。

ジョー　へえ、へえ。

去る。

キーニイ　（凄い微笑で）とうと起つたぜ、君の話した厄介事が。スロカム君。手つ取り早く片付けやう。こんな事は大きく擴げて了はないで、起りがけに押し潰した方がいいんだ。

運轉手　（氣を揉んで）一等運轉手や四等運轉手を起して來ませうか。あいつ等の援が要るかも知れません。

キーニイ　いや、寢かしておけ。俺一人で結構片付けられる。スロカム君。

外からどたどたと足音がして、ジョーを先頭に、船員五人が押し寄せてくる。

彼等は一樣にセエタアを著け、長靴をはいてゐる。毛皮の帽子を手で廻しながら、船長を不穩な目付で見る。

キーニイ　（暫く後）何だ。總代と言ふのは誰だ。

ジョー　（威張つた風に進み出て）あつしなんです。

キーニイ　（冷かに彼を見上げ見下ろして）お前か。話といふのは。手つ取り早く言へ。

ジョー　（船長の凝視に屈しまいと努めながら、彼の視線を避けて）契約の日は今日がお終ひなんです。

キーニイ　（冷酷に）そんな事を俺が知つてるもんか。

ジョー　おいらの考ちや、あんたはまだ歸らうとはなさらないんだ。

キーニイ　さうだ、歸らない。船が鯨一杯になる迄は歸らない。

ジョー　北の方は氷ばかりだから、とても、この上行く事は出來やしません。

キーニイ　氷は破れかけてゐる。

ジョー　（暫く間、その間に、他の者はお互に怒ったやうに咬き合ふ）近頃の食物なんか不味くて食へやしません。

キーニイ　お前達にはあれで結構だ。お前達よりいい人間でも、もつとひどいものを食つてゐるんだ。

群集から怒った叫聲が起る。

ジョー　（この應援に勇氣づいて）船を返さなければ、俺達はもうこの上働かねえつもりです。

キーニイ　（荒々しく）働かねえ、働かねえつて言ふのか。

ジョー　さうです。それに、裁判所へ出れば我々が勝ちます。

キーニイ　お前たちの裁判所なんて何だ！　俺たちは今海にゐるんだぜ。俺が船の中の法律なんだ。（彼の方へ詰め寄って）若僧の癖に何故命令に從はねえんだ。手械にかけられても默つてゐなくちゃならねえんだぞ。

水夫の方から更に怒った叫聲。

キーニイの妻が正面の戸口に現れ、目を瞠って立ってゐる。誰も氣がつかない。

ジョー　（威張って）そんなら、俺達は暴動を起して、自分で船を引つ返す迄だ。おい、皆、さうぢやねえか。

彼が、他の者を見ようとして頭を振り向けた時、キーニイは拳で彼の頭の横側を殴ぐりつける。

ジョーはどしりと打つ倒れて、動かない。

キーニイの妻は鋭く叫んで、手で顔を蔽す。

水夫達はナイフの鞘をはらつて、突き進まうとする。然し、船長と運轉手から短銃を差し向けられて立止る。

キーニイ　（嚙みつくやうな眼と聲で）靜かにしろ！　（一同陰氣に默りこみ、ごちやごちや集って立ってゐる。キーニイの聲は嘲笑で充ちてゐる）この船の中で謀反をすると、命がねえんだぞ。どうだ、分つたか。さあ、お前たちの部屋へ歸れ。それから――（ジョーの體を馬鹿にしたやうに蹴って）こいつを引きずつてゆけ。お前たちのうちで、ずるけた者を見つけ

たが最後、この下に海がある程間違ひなく、撃ち殺してくれるから、さう思つてろ。他の者にもさう言へ。さあ出てゆけ！　早く！（水夫達は、ジョーを連れながら、おぢけて默つて出てゆく。キーニイは短く笑つて運轉手の方へ戻り、短銃をポケットに納ふ）君は、甲板へ上つて、あいつ等が何かこつそりたくらみはしないか見てゐてくれ給へ。これからは、氣をつけてゐる必要があるからな。あいつ等はどんな人間だか分つてゐるんだ。

運轉手　さうですとも。

彼は右手へ去る。

キーニイは妻のヒステリカルな泣聲を聞いて、驚いて、振りむき――靜かに妻の傍に歩み寄る。

キーニイ　（彼女の肩に手を卷いて――ぶつきら棒な親切さで）さあ、アンニイ。怖がるには及ばないんだ。すつかり濟んで了つたんだ。

キーニイの妻　（彼を憚るやうに身を退いて）我慢が出來ないんです、もうこの上とても我慢は出來ません。

キーニイ　（優しく）何が我慢が出來ないつて言ふんだ、え、アンニイ。

キーニイの妻　（ヒステリカルに）この身の毛のよだつやうな殘忍さ。あの獸のやうな人達。そしてこの怖ろしい船。この牢獄のやうな部屋。あたりを取卷いてゐる氷。ひつそりした沈默。

この激動の後、彼女は靜かになり、ハンカチで涙を拭く。

キーニイ　（暫く間、その間に當惑したやうに顏を顰めて彼女を見下ろしてゐる）憶えてゐるだらう、アンニイ、お前にこの航海に來るやうに頼んだのは、俺ではないんだぜ。

キーニイの妻　あたしが、一しよに行きたいと頼んだのです。デヴィド。家の中でたつた一人ぼつちで、あなたのお歸りを待つてゐるのが耐へられなかつたのです、結婚してから六年間といふものは、いつもさうでした――待ち焦れたり、見張りに出たり、氣づかつたりして――心を充してくれるものは何一つなく――學校へかへりたくとも、デヴ・キーニイの妻だといふので、それも出來はしませんでした。あたしは何時でも、あの大きい、廣々とした、輝くやうな海を帆走るのを夢みてゐました。あたし、あなたのお傍で、海の危險や勇ましい生活を共にしたかつたのです。ホームボートの英雄だと言はれてゐ

らつしやるあなたを見たかつたのでした。でも――（聲が顫へてくる）あたしの見るものといへば、氷と寒さと――殘忍さばかりなんですもの。（聲が詰る）

キーニイ　俺はよく言ひきかせたぢやないか。アンニイ。「捕鯨は婦人方の茶會のやうなものぢやない」つて。「お前は女らしい慰の得られる家にゐた方がいい」つて。（頭を振つて）然し、お前はききはしなかつたんだ。

キーニイの妻　（懶さうに）お、あなたが惡いんぢあありません。デェヴィド。でも、あなたの仰しやることがほんたうにはならなかつたんです。考へてみれば、あたし物語にあるヴァイキング（八世紀頃の北海の海賊）を夢みてゐたのでした。あなたをそんな方だと思つてゐたのでした。

キーニイ　（言ひ張るやうに）居心地よく愉快に出來るだけのことはしてゐるんだぜ。（妻はひどく蹙むやうに周圍を見廻す）俺はこのオルガンを、わざわざお前のために街へ買はせにやつたんだぜ。寂しくてつまらない日には時々彈いたら、お前の心が和らぐだらうと思つたからだ。

キーニイの妻　（懶さうに）あなたはほんたうに親切です。デェヴィド。それは分つてゐます。（左手に行き、舷窓のカーテンを引いて、外を見る――突然泣き崩れる）我慢したかありません――我慢が出來ません――罪人のやうにこの壁で閉ぢこめられてゐるのが。（彼のところへ走り寄つて、兩手を捲きつけて、泣く。彼は庇ふやうに肩に手を置く）ここから連れて行つて頂戴！　デェヴィド。ここから出ることが出來なければ、この怖ろしい船から出ることが出來なければ、あたし氣が狂つてしまひます！　家へ連れてかへつて頂戴！　デェヴィド。あたしもう何にも考へることは出來やしません。寒さや沈默が、あたしの頭へ崩れ落ちるやうな氣がします。怖ろしい。家へ連れて歸つて頂戴！

キーニイ　（彼女を目の前に支へながら、氣づかはしさうに顏を見る）ベッドへ行つて休んだ方がいいよ。アンニイ。お前、氣を取り亂してゐるんだ。熱があるんだ。お前の眼の色が變に見える。以前はそんな風に見えた事がなかつた。

キーニイの妻　（ヒステリカルに笑つて）それは氷や寒さや靜かさのせゐです――それは誰をだつて變に見えるやうにせずにはおきません。

キーニイ　（宥めるやうに）運がよければ一月か二月、長くとも三月の中には、この船を鯨で一杯にして、それから船を戻すためにはどんな事でもしよう。

キーニイの妻　でも、それを待つてる事は出來やしません——あたしには出來ません。あたし、家へかへりたいのよ。それに、船員達も待つてはくれないでせう。やつぱり歸りたがつてゐます。殘酷です、殘忍です、それを引きとめておくのは。あなたは船をお返しなさらなけあいけませんわ。あなたには何の理由もございません。今度こそ南方はさえざえした水なんですもの。あなたに優しい心がおありでしたら、船を返して下さらなけあいけませんわ。

キーニイ　（嚴めしく）俺はかへす事は出來ない。アンニイ。

キーニイの妻　どうしてです。

キーニイ　女には俺の氣持がはつきりとのみこめないんだ。

キーニイの妻　（荒々しく）それは馬鹿げた頑固な氣持だからですか。あなたが二等運轉手と話してゐらつしやるのを聞きました。他の船長達が、あなたが船一杯にして歸らなかつたからつて、あなたを嘲るのを怖れてゐらつしやるんです。あなたは、假令水夫達を毆つたり餓えさしたりし、そのためにあたしを狂氣にしても、つまらない名聲が得たいんでせう。

キーニイ　（頑固に頭を搖ゐて）さうではないのだ、アンニイ。他の船長なんかに、俺を面と向つて冷笑させるものか。誰だつてそんな事は云ひはしない——然し——（躊躇し、自分の心持を言ひ表はさうと努めながら）俺はいつでもさうやつて來たんだ——船長になつた最初の航海からこの方。俺はいつでも歸つたんだ——船一杯にして——だから——とにかく——船一杯にして歸らなきやいけないんだ。俺は捕鯨では、いつでもホームポート一番の船長なんだ、それに——俺の言ふ意味が分らないかい。アンニイ。（彼女を見る。彼女は彼を見ないで、ぼんやりと前方を見詰めて、彼の言葉を一言も聞いてゐない）アンニイ！（彼女は驚いて自分に歸る）寢た方がいいよ、アンニイ。いい子だから。お前、氣分が惡いんだ。

キーニイの妻　（正面の扉へ彼が連れていかうとするのを拒んで）デェヴィド！　どうか歸つては下さいませんか。

キーニイ　（優しく）駄目だよ、アンニイ――もう暫くは。お前には俺の氣持が分らないんだ。俺は鯨を捕らなきやならないんだ！

キーニイの妻　あたたにお金が要るのなら別です。でも、さうではないんです。あなたはお金をどつさり有つてゐらつしやる。

キーニイ　（我慢が出來ないやうに）俺の考へてゐるのは金ではないんだ。俺をそんな卑しい人間だと思ふかい。

キーニイの妻　（ぼんやりと）いいえ――あたしは知りません――あたしには分りません。――（熱心に）あたしもう一度昔の家へかへりたい。あの臺所をもう一度見たい。あたしに話しかける女の方の聲をききたい。あたしも話したい。この二年間！　何て遠い昔のやうに思へるんでせう――まるであたしが死んでしまつて、二度と歸つてゆく事が出來ないかのやうです。

キーニイ　（彼女の異樣な調子と、遠くを見てゐるやうな眼差とに、氣を採みながら）さあ、お休み、アンニイ。お前、氣分が悪いんだよ。

キーニイの妻　（彼の言葉が耳にはいらない樣子で）あなたのお留守の時は、あたしはいつも一人で寂しかつた。何時でもホームポートは馬鹿げたつまらない處だと思つた。それから、風のある浪の碎けたる日はことによく、庭のベンチに坐つて、あなたが送つてゐらつしやるに違ひない美しい自由な生活を夢みてゐた。（半分啜泣の笑をして）あたしあの頃は何時でも海を愛してゐた。（一寸休み、ゆつくりと強く話し續ける）でも、今では――もう二度と、海を見たくはありません。

キーニイ　（彼女の機嫌を取らうと考へながら）此處は慥に、女には適しない處だ。お前を連れて來たのは、俺が馬鹿だつた。

キーニイの妻　（暫く間――哀れな疲れ切つたやうな身振をして、手を眼の上に横切らせて）故里にかへる迄にはどの位かかるでせうか――今すぐと立つたら。

キーニイ　（顏を顰めながら）さうだなあ。うまくいつて二月位だ。

キーニイの妻　（指を折つて――うつとりとうれしさうに笑ひながら）八月になるのね、八月の末頃に。さうぢやなくつて。あたし達が結婚したのは、八月の二十五日でしたわね。デ

ヴィド。

キーニイ　（彼女の追憶で心を動かされたのを隠さうと努めながら――荒っぽく）お前、憶えてゐるかい。

キーニイの妻　（ぼんやりと――もう一度手を眼の上に横切らして）こんな氷の中に閉ぢこめられてゐると――追憶があたしを離れてゆく。もう遠い昔のことだわ。（間――夢みるやうに微笑んで）今は六月ね。紫丁香花（ライラック）は前庭で花盛りでせう――それから邸の横の四つ目垣の野薔薇は、もう蕾をもつてゐるでせう。

突然両手で顔を掩うて、泣き始める。

キーニイ　（困って）はいつてお休み。アンニイ。お前は、どうにも出來ない事をくよくよして、泣き疲れたんだ。

キーニーの妻　（突然、彼の頸に両腕を巻いて、彼に抱きつきながら）デェヴィド、あなた、あたしを愛してゐて？

キーニイ　（この感情の爆發に驚き當惑して）お前を愛してゐるかつて？　どうしてそんな事

を訊くんだ、アンニイ。

キーニーの妻　（彼をゆすり――強く）愛してゐて？　え、デェヴィド。話して頂戴。

キーニイ　俺はお前の夫だ。そして、お前は俺の妻だ。この年月、二人の間に、愛の外何があらうか。

キーニーの妻　（再び彼をゆすつて――一層強く）では、ほんたうに愛してゐて下さるの？　それを話して頂戴。

キーニイ　（ぶっきら棒に）愛してゐるとも。アンニイ。

キーニーの妻　（ほっとした溜息を漏らして――両手を両側へ落す。キーニィは氣づかはしげに彼女を見てゐる。彼女は眼の上に手を横切らせて、半ば獨言のやうに呟く）あたし時々、子供が一人ありさへすればと思ふわ。（彼は深く感動して、傍を向く。彼女は彼の腕をひつ掴んで、自分の方に顔を向けるやうに彼を振り向かす――強く）あたし、あなたには何時でも良い妻ではなくつて、え、デェヴィド。

ネーニイ　（彼の聲は感情を現はすまいと思ひながらも現はして）ほんたうに、お前のやうな良

い妻はゐやしない。アンニイ。

キーニーの妻　それに、あたし無理なお願なんかしなかつたわ、ね、さうでせう、デェヴィド。

キーニイ　俺は、自分の力で出來ることなら何でもしてやつた積りだ。

キーニーの妻　（夢中で）では、あたしのために一度だけして下さい——後生ですから、家へ連れて歸つて頂戴。こんな生活はあたしを殺してしまひます——この殘忍さ、寒さ、怖れが。あたし氣が狂ひさうです。この空氣があたしを脅かすやうなんです。あたしを脅かすやうなこの靜さが聞えます——來る日も來る日も灰色で、いつも同じ日です。あたしには我慢が出來ません。（啜り上げながら）氣が狂ひさうです。氣の狂ひさうなのが分ります。あなたが仰しやるやうにあたしを愛して下さるなら、家へ連れて歸つて頂戴。あたし、怖ろしいのよ。お願ですから、連れて歸つて頂戴。

彼女は彼に兩腕を巻きつけて、肩に縋れて泣く。彼の顏は、心中に起つてゐる劇しい爭鬪を現はしてゐる。彼女が腕に抱きこみ、顏を柔らげる。暫く、彼の肩は弛み、氣が弱くなり、涙によご

れた彼の顏を見た時、鐵のやうな心も挫かれる。

キーニイ　（努力しながらやつと口を開いて）歸ることにしよう、アンニイ——お前のために——お前がさうしてほしいと言ふなら。

キーニーの妻　（夢中に悅んで——彼に接吻しながら）まあ、有難う、デェヴィド。

彼は妻から獸つて離れて、船室昇降口の方へ行かうとする。丁度その瞬間に、階段にことこと足音がして、二等運轉手がはひつて來る。

運轉手　（昂奮して）氷が北方へ開けてきたんです。船長。氷原の間に鮮かな航路が出來た、向うは鮮かな水だ。見張りの男が、さう言つてます。

キーニイは夢現の境から出て來た者のやうにつつ立つ。

キーニイの妻は、運轉手の方を脅かされたやうな眼で見る。

キーニイ　（茫然とし——考を集中しようと努力して）鮮かな航路が？　北方へ？

運轉手　さうです。船長。

キーニイ　（彼の聲は決心して急に强く）では、支度をしろ。船を進めるんだ。

運轉手　はい。はい。

キーニーの妻　（嘆願するやうに）　デヴィド！

キーニイ　（彼女には注意しないで）　水夫どもは悦んでやるだらうか、曳きずり廻さなけやならないのか。

運轉手　無論悦んでやりますよ。あなたを神のやうに怖れてゐます。あいつ等、羊のやうに臆病です。

キーニイ　では、船を進めよう——見張りは二人だ。（もの凄い決心で）　鯨は氷原の兩岸にゐる。そいつを捕へるんだ。」

運轉手　はい。はい。船長。

彼は急いで出でゆく。

暫くして、外の甲板から足を曳きずる音、命令を下してゐる運轉手の叫聲が聞える。

キーニイ　（大聲で獨言する——嘲るやうに）　さあ、これで威氣揚々と歸れるといふもんだ。

キーニーの妻　（嘆願するやうに）　デヴィド！

キーニイ　（嚴格に）　女は、男の仕事に干渉したり、男の氣を弱めたりする時は、正しい事をしてはゐないんだ。お前には、俺の氣持が分りつこないんだ。俺は、お前のために、自慢の出來る立派な夫である事を示さなきやならない。俺は鯨を捕へなけきやならないんだ！

キーニイノ妻　（哀願するやうに）　あなた！　歸つては下さらないの？

キーニイ　（この間に氣を留めずに——命令するやうに）　お前、氣分が惡いんだ。行つて、暫く休むがいゝ。（戸口の方へ歩きながら）　俺は、甲板へ出なきやならない。

キーニイ去る。

彼女は苦闘の餘り彼の後から叫ぶ。「デヴィド！」

間。

彼女は眼の上に手を横切らす——それから、ヒステリックに笑ひ始めて、オルガンの方に行く。腰を下ろして、讃美歌の一つを夢中で彈き始める。

キーニイが、甲板に通ずる戸口から再びはひつて來て、怒つて彼女を見ながら立つてゐる。近寄つて、彼女の肩を荒々しく掴む。

キーニイ　おい、これは何て馬鹿げた嘲笑だ。（彼女は氣が狂つたやうに笑ふ。彼は驚いて跳び

退さる）アンニイ。どうしたんだ！（彼女は答へない。彼の聲は顫へる）俺が分らないのか。アンニイ。

彼は兩手を彼女の肩にかけて、自分の方へ振り向けたので、彼女の眼を見ることが出來る。彼女は、間の抜けた表情をして、脣にぼんやりした微笑を浮べて、彼を眤と見上げる。

彼は跪跟いて彼女を離れる。彼女を靜かに再びオルガンを彈き始める。

キーニイ　（苦しさうに息をのみこんで――喋るのが困難であるかのやうに、しやがれた低い聲で）しまつた――お前は、氣が狂ひさうだつて――さう言つた！（長い唸りが上の甲板から聞える）あ、鯨の潮をふく音だ！

間も無く運轉手の顏が天窓の向うに現はれる。彼にはキーニイの妻が目にはひらない。

運轉手　（ひどく昂奮して）鯨です、船長。――群をなして――右舷船尾から五哩向うです――大きい奴です。

キーニイ　（電氣にかけられたやうに動いて）ボートは下ろしてゐるか。

運轉手　はい。船長。

キーニイ　（凄い決心で）俺も一しよに行かう。

運轉手　はい、はい。（歡呼しながら）今度こそうんと鯨が捕れますぜ。

彼は頭をひつこます。

彼の大聲で命令してゐるのが聞える。

キーニイ　（妻の方へ向いて）アンニイ。お前、あの男の言ふのを聞いてたか。俺は鯨を捕るんだ。（彼女は返事もしなければ、彼がそこにゐるのも知らない樣子である。彼は苦しさうに笑ふ。それは呻きのやうである）お前、俺を馬鹿にしてゐるのは分つてる。アンニイ。お前正氣を失つてゐやしないか――（心配さうに）え。今度こそ俺はどつさり鯨を捕るんだ――もう一寸の間だ、アンニイ――さうしたら故里（くに）へ歸らう。今は、歸ることが出來ない。え、分つてるね。俺は鯨を捕らなけあならないんだ。（突然恐怖に襲はれて）返事をしてくれ。お前、氣が狂ひはしまいなあ。

彼女はオルガンを彈き續ける。然し、何の返事もしない。

運轉手の顏が再び天窓の向うに現はれる。

運轉手　用意が出來ました。

キーニイは妻に背を向けて、戸口へ大股で突き進む。其處で暫く立止つて、心配さうに彼女を見返し、感情を制へようと戰つてゐる。

運轉手　早く！　船長。

キーニイ　（彼の顏は急に決心で嚴格になる）よし。

彼はくるりと振り向いて去る。

キーニイの妻は彼の去つたのに氣がつかないらしい。注意の凡てを、オルガンに集中してゐるやうに見える。半ば眸を閉ぢて坐り、讃美歌のリズムにつれて體を左右に少しゆすつてゐる。指先は次第に早く動き、無我夢中で滅茶苦茶に彈いてゐる。

――幕――

十字の在る處

人物

船長アイザイア・バアトレット
ナット・バアトレット　その息子
シュ・バアトレット　その娘
醫師ヒギンズ
サイラス・ホオン　二檣縱帆船（スクーナア）マリイ・アランの運轉手
ケイツ　同じく水夫長
布哇人ヂミイ　同じく魚叉を打つ男

景

船長バアトレットの「船室」――見張室として建てられた部屋で、カリホルニヤ海岸の高地にある彼の家の頂上に在る。部屋の内部は、深海を航する帆船の船長室と同樣の作りをしてある。左手前方に圓窓（舷窓）が一個。その後方に、船室昇降口の階段。更に後方に舷窓二個。正面左手に、上を大理石で飾つた食器棚があつて、その上に船員用の角燈が載つてゐる。正面中央に戸口があつて、その向うに、家の下層に通ずる階段がある。毛布のついた寢臺が、戸口の右手の壁に喰つつけて置いてある。

右手壁には、舷窓が五個。そのすぐ下には木造のベンチが一個。そのベンチの前には長い卓が一個と背の眞直な椅子が二脚あつて、一脚は卓の前方に、一脚は左側にある。

床には、安物の暗い色の敷物が敷いてある。

天井、前方から後方にかけて天窓が一個あつて、戸口に向き合つた側から、卓の左端の上まで擴がつてゐる。天窓の右端に、航海用の浮遊羅針がある。羅針函の光は上方からこの上に流れ落ちて、部屋の中へ流れこみ、床の上に羅針のぼんやりした圓い影を投げてゐる。

一九〇〇年の秋の、朗かな風のある夜の、早くである。月光は、古い家の頑強な隅々に唸る風に吹

き分けられ、疲れたやうに鎧窓から倒ひこみ、床や卓の上に疲れ切つた塵のやうに、圓い補綴になつて影を落してゐる。絶えず打ち寄せる波の單調な音が、微に遠く、下の海岸から響いてくる。

幕が上ると、正面の戸がゆつくりと開かれて、ナット・バアトレットの頭と肩とが敷居越しに現はれる。彼は、部屋の中を素早く見廻して、誰も居ないのが分ると、踏み殘した階段を登つて、はひつて來る。彼は後の暗闇にゐる誰かに合圖をして言ふ。「ようございますよ。先生。」醫師ヒギンズが彼に跟いて部屋へはひつて來て、戸を閉めながら非常な好奇心に驅られてあたりを見廻しつつ立つてゐる。彼は三十五歳位で、ほつそりとした、中背の、學者らしい風采である。ナット・バアトレットは非常に背が高く、痩っぽちで、締りの無い體格をしてゐる。彼の右腕は肩のところで切斷されてゐて、その著てゐる重々しいマッキノウ(印度人などの著る毛布)の右袖は、締り無く垂れ下つて、動く度に、體を叩くやうになる。彼は三十歳であるが、それよりもずつと老けて見える。その兩肩は、櫛をあてない縺れた重々しい黒髪の頭が重荷なので壓倒されたかのやうにだらさうに垂れ下つてゐる。顔は長く、骨ばつてゐて、青白く、黒い眼は深く凹み、大きい鉤鼻で、脣の薄い、廣い口は、齒れた針毛の口髭で掩はれてゐる。聲は、低く、太くて、滲み入るやうな、洞ろな、金屬の鳴るやうな調子を帶びてゐる。マッキノウを著てゐる上に、こーる天のズボンをはき、それを、深い編上げ靴の中に押しこんでゐる。

ナット　見えますかしら。先生。

ヒギンズ　(心の落著きのないのを、思はず示すやうな調子で)見えますとも――すつかり――御心配にやあ及びません。月の光が大變明るいので――

ナット　丁度いい時でした。(ゆつくりと卓の方へ歩きながら)あの人には、光なんか要らないんです――近頃では――ただ、あすこの羅針箱から來る光だけ要るんです。

ヒギンズ　あの人と仰しやると？　ああ――お父さんの事を言つていらつしやるんですね。

ナット　(性急に)外に誰がゐますか。

ヒギンズ　(一寸吃驚し――迷惑さうにあたりをじろ〳〵見ながら)この部屋はすつかり船室に型どつてあるんですね。

ナット　ええ、さうです――わたしが、あなたに前以て御注意申したやうに。

ヒギンズ　(驚いて)注意したつて？　どうして、注意したつて仰しやるんです。わたしには、大變當り前のことに見えます――それに、興味もございます――お父さんのこの風變りなお好みが。

ナット　（意味ありげに）興味は、あるかも知れません。

ヒギンズ　それに、あなたは仰しやいましたね。お父さんは此處に住んでいらして――何時だつて、下に降りてはいらつしやらないつて。

ナット　ええ、決して降りては來ないんです――この三年間といふものは。いつでも、妹が食事を此處へ運んで來るんです。（卓の左手の椅子に坐る）あすこの食器棚の上に角燈がごぢいますね。先生。あれを持つて來て、坐つて下さい。灯をつけませう。御免なさい。あなたを屋根の上のこんな部屋へお連れしたりして――でも――此處では、わたし達の話を聞く者は誰もゐません。それに、父の氣遊じみた生き方を、あなた御自身で見て頂きたかつたんです。――分つて下さるでせう。わたしが、あなたに事實をすつかり知つて頂きたい心持を――さうです、事實をです。それには、灯が必要なんです。それが無ければ――事實は、此處では夢になるんです――夢に。先生。

ヒギンズ　（ほつとしたやうに微笑して、角燈を持つて來る）ちよいと、お化でも出さうな代物ですね。

ナット　（その言葉には氣が付かないやうに）父は、この灯には氣がつかないでせう。父の眼は、絶えず忙しさうに――あの向うを見てゐますから。（左手を投げ出すやうに海の方へ廣く擴げる）父は氣がつけば――さうです、屹度、降りて來ますよ。でも、晩かれ早かれ、あなたは父にお會ひなさるに違ひありません。

彼はマッチを擦つて、角燈に灯を點す。

ヒギンズ　何處にゐらつしやるんです――お父さんは。

ナット　（上方を指さして）あの上の、上甲板です。まあ、お坐りなさい。父は來はしないでせう――まだ暫くは。

ヒギンズ　（こはごは卓の前の椅子に腰を下ろしながら）では、屋根も船のやうな裝置になつてゐるんですか。

ナット　ええ、先刻もお話した通りです。甲板のやうになつてゐるんです。舵や、羅針盤や、羅針箱の光や、ほら、あすこに船室昇降口やがあるでせう。（指差す）昇り降りする船橋もあります――あすこで見張りをするのです。風がこんなに強くなければ、聞える

のです――夜つぴて――父の歩き廻る足音が。（突然荒々しい調子で）わたし、話しません
でしたか。父が氣が狂つてゐるつて。

ヒギンズ　（職業的な態度で）それは耳新しい事ぢやございません。わたしは、あの向うの
養育院へ來た當初から、あなたのお父さんの事はいろいろな方面から聞いてゐます。お
父さんは、夜分だけお歩きになるんですか――あの上の方を。

ナット　さうなんです。夜分だけです。（凄く）父の見たがつてゐる物は、晝ぢや見えはし
ないんです――夢か、それに似たものですからね。

ヒギンズ　でも、一體何を見ようとしてゐらつしやるんです。誰方（どなた）か御存知なんですか。
お話にでもなつたんですか。

ナット　（性急に）そりや、父の見たがつてゐるものは、誰だつて知つてゐますよ。船たん
です。勿論。

ヒギンズ　どんな船ですか。

ナット　父の船です――マリイ・アランつて言ふんです――亡くなつた母の名をとつて附

けたんです。

ヒギンズ　でも――わたしには呑みこめませんが――船の歸港が遲れたんですか――それ
とも何か外の……？

ナット　セリビイス沖の嵐で、積みこんだものを殘らず無くしたんです――三年前に。

ヒギンズ　（不思議さうに）ええ。（間）でも、お父さんはまだ何か疑を殘してゐらつしやる
んですか――

ナット　父にも、外の誰にも、疑ふ餘地なんかあらう筈が無いんです。船がくつがへつて
ゐるのを、すつかり難破してゐるのを、捕鯨者のヂョン・スロカムが見たのです。それは
嵐の二週間後のことです。皆は、ボートを下ろして、船の名を讀んで來たのです。

ヒギンズ　お父さんは、お聞きにはならなかつたんですか――

ナット　いいえ、勿論、一番先に聞いたのです。父は知り過ぎる程知つてるんです――あ
なたがそれを尋ねてゐらつしやるのでしたら。（醫師の方へ身を屈めて――熱心に）父は知
つてるんです。先生。よく知つてるんです――でも、信じようとはしないんです。信じ

ることが出來ないんです――そして、今迄生き長らへてゐたんです。

ヒギンズ　（性急に）さあ、バアトレットさん。とにかく要件に取りかかりませう。あなたは、事件を一層不明瞭にするために、わたしを此處へ連れていらしたんではないでせうね。ですから、あなたのお話になつた事實と言ふのを聞かせて下さい。お父さんを養育院へお連れする場合に、お父さんに同情ある取扱を得るためには、是非事實を知つておく必要がありますからね。

ナット　（氣づかはしさうに――聲を落し）では、今夜、父を連れに來て下さいますか――間違ひなく。

ヒギンズ　此處をお暇して二十分もすれば、馬車で歸つて來ます。間違ひはありません。

ナット　では、この家の案内がお分りですかしら。

ヒギンズ　ええ、それは大丈夫覺えてゐます――でも、わたしには分らないんですが――

ナット　表の戸はあなたのために開けておきませう。すぐに遣つて來て下さい。妹とわたしと、此處にゐませう――父と一しよに。で、あなたには理解して頂けるでせうね――妹

もわたしも、今度の事については何にも知らないのです。當局にお願したのは――わたし達ぢやございません――他の者なんです。父には迚もそんな事は分りますまいが――

ヒギンズ　さうです。さうですとも――だが、わたしにはまだ分りませんが――お父さんは亂暴はなさいませんか。

ナット　いいえ――それはありません。父はいつでも音無しいです――音無し過ぎる位です。併し、何かをしないとも限りません――何かを――若し、父に分るならば――

ヒギンズ　では、御信頼下さい。お父さんにはお話しませんから。併し、助手を二人連れて來ませう、萬一の場合に――（急に話を中止し、實際的な調子で話し續ける）では、お差支無ければ、今度の場合の事實といふのをお話し下さい。バアトレットさん。

ナット　（頭を振つて――陰鬱に）事實によつていろいろな場合が考へられるんですが――まあ、話しませう――要點を。父は、祖父と同じやうに捕鯨船の船長だつたのです。父が最後の航海をしたのは、七年前でした。その航海には、二年間出かけてゐる筈でした。ところが、四年後になつて、やつと父は歸つて來ました。それといふのは、父の船が印

度洋で難破したのでした。父と他の六人の者とが、やつとの事で、アアキベラゴオの端にある小さい島に著いたのです――地獄のやうに不毛の島です、先生――甲板の無いボートで七日間も漂つた揚句の事です。殘りの捕鯨者たちは、饑にでもやられたものか――何の消息も無いのです。父と一しよにこの島に漂着した六人の者も、馬來人の獨木船の一隊が拾ひあげてくれた時には、三人だけが生き殘つてゐたのです。それも、飢と渴きで氣が狂つてゐたのでした。父をまぜて四人の譯です。この四人がやうやうの事でフリスコ（サンフランシスコ）へ著いたのでした。（非常に言葉に力を入れて）それは、父に、運轉手のサイラス・ホオンに、水夫長のケイツに、布哇人の魚叉打ちのヂミイとです。この四人なんです。（空笑ひしながら）あなたにお聞かせする事實は澤山あります。それは、すつかり當時の新聞に載りました――父の話として。

ヒギンズ　然し、その島に著いた他の三人はどうしたのですか。

ナット　（荒々しく）多分、天日に曝されて死んだんでせう。でなけりや、多分、氣が狂つて、海の中へ躍込んだんでせう。さういふ話でした。でも、こんな噂もあるにはあつたのです。多分、殺されて、食はれたんだらうつて。然し、何處かへゐなくなつた――死んでしまつた――それは、疑ふ餘地の無い事です。事實といふのはさうなんです。他の者のことは――誰が知つてゐるでせう。そんな事は何でも無いことぢやないでせうか。

ヒギンズ　（身震して）いいえ、何でもありますよ――慥に。

ナット　（烈しく）わたし達は、事實の話をしてゐるんです。先生。（笑つて）事實と言ふのは、まだあるんです。父は、三人の者を一緒にこの家へ連れて來ました――サイラス・ホオンとケイツと布哇人ヂミイです。わたし達は初めは、父だといふ事がどうしても分らなかつた位です。父は、地獄を通つて、地獄を見て來たのでした。髪は白くなつてゐました。でも、あなたは、ちきに――御自分でお分りになるでせう。他の者も――みんな少し妙なんです――氣が狂つてゐると、お考へになつてもいい譯です。（再び笑つて）事實はそれだけぢやありません。先生。みんなの者はその島を立ち去つてから、夢想を始めたのです。

ヒギンズ　（疑ふやうに）多分――事實はこの位で十分でせう。

ナット　まあ、待つて下さい。（ゆつくりと再び話を始める）或日、父がわたしを呼んで、他

の者のゐる前で、その夢の話をしたのです。わたしが、祕密を受け繼ぐべき人間だといふのです。父の話によると、島に著いて二日目に、樹木で掩はれた入江で、馬來人の使ふ廢朽した獨木船を見つけたのです――海賊がよく使つてゐるやうな特殊な戰船なんです。その船はそこで腐つてゐたのでした――どれ位長くあつたものか、誰にも分らう筈はありません。乘組員は何處へ往つたものか、影も形もないのです――何處に行つたか、誰が知つてゐるもんですか。その島には、人が來たやうな痕跡なんか少しもありはしないんですから。布哇人の連中は、その船へ泳いで行つたんです――あいつ等は、水の中を潜ることにかけちや、惡魔のやうな連中ですからね――そして、見つけたんです――二つの箱の中に――（椅子に凭れながら、皮肉な微笑を浮べて）何だとお思ひですか。先生。

ヒギンズ　（それに答へるやうに微笑して）寶でせう。勿論。

ナット　（前に屈み出ながら、責めるやうにヒギンズを指さしながら）どうです。それを信じる氣持が、あなたの心の中にも、やつぱりあるんです！　（それから、くつ〳〵洞ろな笑をしながら、椅子に凭れて）ええ、さうでせう。寶ですとも。無論。他の何なものでせうか。

彼等はそれを陸に索をあげたんです――それから、お分りでせうが――金剛石に、エメラルドに、黃金の裝飾品に――勿論、とても數へ切れない位なんです。どうして、夢の內容を制限することが出來るでせう。はつはつ。（自分自身を嘲笑するかのやうに、莞爾しく笑ふ）

ヒギンズ　（ひどく興味を感じて）それから、どうなつたんです。

ナット　彼等は氣違ひになり始めたのです――飢や渴きやなんかで――そして、もの覺えが無くなり始めたんです。さうです、すつかり記憶を失つたのです、でも、その方が、却つて仕合だつたでせうね。然し、父の話では、父には、一切の出來事に覺えがあるから、かうだと主張するのです。皆の者が、自分達のやつてゐる事が分つてゐた時には、屹度どうしたと言ふのか、當てて御覽なさい。先生。はつはつ。

ヒギンズ　寶を埋めたんですか。

ナット　（皮肉に）單に、それだけでせうか。はつはつ。それから、炭片で――地圖をつくつたんです――それもやつぱり古い夢でさあね。そして、父がその地圖をあづかつてゐたんです。それから間も無く、今もお話したやうに、氣が變になつてゐたところを、馬

來人に拾ひ上げられたんです。（嘲笑を止めて、再び穏かなゆつくりした調子になつて）でも地圖は夢ではありません。先生。又、事實の話に戻りませう。（マッキノウの衣兜の中へ手を突込んで、皺になつた紙を取り出す）これなんです。

その紙を卓の上に擴げる。

ヒギンズ　（熱心に頭を伸して）ほう、それはそれは。面白いですね。で、一體、寶は何處にあるんです——

ナット　この十字の在るところなんです。

ヒギンズ　それに、署名がしてありますね。それから、その印は？

ナット　布哇人ヂミイの印です。あれは、字が書けないんです。

ヒギンズ　その下のは？　それは、あなたのぢやございませんか。

ナット　さうです。わたしんです、この祕密の後繼者としての。マリイ・アランが、その寶を持ちかへるために出帆した朝、皆で此處へ署名したんですよ。父は、その二檣縱帆船を艤裝するために、この家を抵當に入れたのでした。はつはつ。

ヒギンズ　では、お父さんは今でもまだ待つてらつしやるんですね——三年前に沈んでしまつたその船を。

ナット　さうです。マリイ・アランを。三人の者がそれに乘つて出かけたんです。その島の大凡の位置を知つてゐるのは、父と運轉手と——それに、後繼者としての——わたしだけなんです。それは——（躊躇し、眉を顰めて）何でもないんですが。わたし、氣違染みた祕密を守りませう。父も一緒に船に乘つて行きたがりました——でも、母が亡くなつたもんですから。わたしも、行きやしませんでした。

ヒギンズ　では、あなたは行きたがつたんですね。寶の事はほんとうだと思つてゐらしたんですね。

ナット　さうなんですよ。はつはつ。どうも、信ぜずにはゐられませんでした。母の亡くなる迄は、ほんたうにしてゐました。そのうちに、父は狂人に、すつかり狂人になりました。父は、この船室を建てました——見張りをするために——それに、時の經つにつれてわたしの疑が增して來るのを、變に思つたんでせう。だもんですから、最後の證據

として、誰にも見せずに匿しておいたものを、わたしに呉れたんです――一番貴重な寶の見本なんです。はつはつ。これなんです。

（ポケットから、寶石を密に鏤めた重々しい腕環を取り出して、卓の上の角燈の傍に投げ出す。）

ヒギンズ　（強い好奇心を以てそれを取り上げる――我を忘れたかのやうに思はず）ほんたうの寶石ですか。

ナット　はつはつ。あなたも矢つ張り、ほんたうになさりたいんですね。――何にね――硝子と眞鍮の――馬來人の裝飾品でさあ。

ヒギンズ　調べて御覽になつたんですか。

ナット　調べて見ましたとも。まるで馬鹿のやうに。（それをポケットへ納ひこみ、重荷を振り落さうとするかのやうに、頭を振る）もうお分りでせう。父が船の歸りを待つてるうちに――狂人になつた譯を――結局わたしが、父を安全でゐられる處へ連れて行つて頂くやうに、あなたにお願ひしなければならなかつた譯を。抵當は――船の値段になつてゐるんですが――もう期間が切れる筈です。ですから、ここを立退かなきやならないんです、妹とわたしは。父を一しよに連れてゆく事は出來ないんです。妹はちきに結婚する筈です。多分、海の見えないところでは、父は――

ヒギンズ　（お役目的な調子で）まあ、最善をつくしませう。あなたの立場はよく分りました。（立ち上り、微笑しながら）有難うございました。面白いお話をお聞きして。又、お父さんが寶のことで夢中におなりになる時は、どう御機嫌を取つていいかも分りました。

ナット　（陰鬱に）父はいつでも穏かです。穏か過ぎる位です。ただ、見張りをしながら――あつちこつちと歩くだけです――

ヒギンズ　では、わたくし、お暇しなくちや。如何でせう。今夜お連れした方がいいでせうか。

ナット　（説得するやうに）さうして下さい。先生。近所の人は――近くにはゐませんけれど――妹のためには――ね。さうでせう。

ヒギンズ　さうですとも。こんな場合には――お妹さんには辛くするのは仕方のない事です――よろしうございます。――（戸口へゆくナットが戸を明ける）ちきに歸つて來ませう。

彼は階段を下り始める。

ナット　（迫るやうに）どうぞお間違なく。先生。まつすぐに歸つて來て下さい。父はここにゐるでせう。（彼は戸を閉め、注意深く爪先で船室昇降口に近寄る。二三歩それを昇つて、上方で何か音がしないかと耳を傾けて暫く立つてゐる。それから、卓の方へ行き、角燈の光を細くし、鎖を手で支へ、肘を凭らせながら、坐る。昵と陰鬱に前を見詰める。正面の戸が靜かに明く。扉が微かに軋ると、ナットは跳び上り――驚の不明瞭な聲で）誰だ？

戸が廣く開いて、シュ・パアトレットの姿が現れる。

彼女は部屋へ上つて來て、後の戸を閉める。

背は高く、ほつそりしてゐる。二十五歳である。赤黒い豐かな髪で輪廓をとられた顏は、青白くもの哀しさうである。この髪が、彼女に色彩らしい唯一の色彩を與へてゐる。その厚い唇は青白く、人なつつこい大きい眸の青さは、薄闇い灰色に變じてゐる。聲は低く、憂鬱な調子を帶びてゐる。暗い色の肩掛をかけ、スリッパをはいてゐる。

シュ　（立ち止つて、兄を眺めるやうに見る）あなたお一人なの。何を怖がつてゐらつしやるんです。

ナット　（眼を逸らして、再び椅子に凭れる）何でもないんだよ。俺は知らなかつた――お前、部屋にゐることとばかり思つてた。

シュ　（卓に近よつて）本を讀んでゐたんです。すると、誰か階段を下りて出てゆくやうな音がしました。あれは誰方なの。（急に驚いて）お父さんぢやあ――ないでせうね。

ナット　さうぢやあないさ。お父さんは、いつものやうに――あの上だ――見張りをしながら。

シュ　（坐りながら――言張るやうに）一體、誰方なの？

ナット　（曖昧な口調で）或人だよ――俺の知つてゐる。

シュ　誰方なのさ。その或人といふのは。あなたは何か隱してゐらつしやるのね。話して頂戴。

ナット　（反抗的に眼を擧げて）醫者だよ。

シュ　（駭いて）まあ！　（素早く直感して）あなたはお醫者さんをここへ連れてゐらしたのね――あたしに知れないやうに。

ナット　（强情に）そんな事があるもんか。ここへ連れて來たのは、様子を見て貰ふためだ——お父さんの容態を相談するためなんだ。

シュ　（答へられるのを怖れるかのやうに）そのお醫者さんといふのは——養育院からいらした方ぢやなくて？　え、ナット、あなたは——

ナット　（それを遮つて——荒々しく）いや、そんな事あぁるもんか。まあ、靜かにするがいい。

シュ　多分、これが——最後の情ないことになるんぢやないでせうか。

ナット　（反抗的に）どうして？　お前、いつでもさう言つてゐるぢやないか。今の狀態よりももつと情ないことがあらうか。屹度——海の見えないところへ——お父さんを連れて行つた方が——お父さんのためには好いに違ひないんだ——さうすれば、お父さんは歸つて來ない船や、決して手にはひらない寶を、待つてゐるやうな、そんな氣違ひじみた考を忘れてしまふのだ。（納得させようとするかのやうに——烈しく）俺はさう信じてゐるんだ。

シュ　（恨めしさうに）さうぢやないわ。ナット。お父さんは、海と一しょに生活出來ないから、お亡くなりになるのが、あなたに分つてゐる筈ですわ。

ナット　（苦々しく）そして、お前には、老ぼれのスミスが抵當を流してしまふのが、分つてゐるのだ。そんな事は何でもないさ。支拂が出來ないんだもの。スミスは昨日俺のところへ來て、相談していつたよ。あいつは、どうしていいか——拔け目のないところを知つてゐる。畜生。まるで俺たちを借家人同樣に扱つてゐるんだ。そして、ぢきに抵當を流してしまふと、きつぱり言つてた——若しも——

シュ　（熱心に）どうだと言ふの。

ナット　（苦しさうな聲で）若しも、父を——連れて——ゆかないなら。

シュ　（苦惱のあまり）おお！　どうして、どうしてなんです。お父さんは、あの人に何のかかはりがあるんです。

ナット　財產の價格からだよ——この家は、あいつのものなんだから。スミスのものなんだから。近所の人は怖がつてる。毎晩、町から農場へ歸つて來る道で、ここを通り過ぎる。そして、父があの上の方で、空に向つて腕を振りあげながら——歩き廻つてゐるの

を見るんだ。皆、怖がつてるんだ。不平を並べてるんだ。父のためにも、何處へか行かなくちやいけないつて、言つてるのだ。この家には幽靈が出るつて、蔭口をきいてる位だ。だから、老ぼれのスミスの奴、自分の財産が心配になるのだ。父が、この家へ火でも放けやしないか——何か仕出かしやしないかと思ふんだ——

シュ （絶望しながら）でも、あなたはスミスに話してやらなかつたの？　そんな事は馬鹿げた事だつて。お父さんは音無しい、いつでも音無しいつて。

ナット そんな事を言つたつて、何になるもんか——皆がさう信じてゐるのに——怖がつてゐるのに。（シュは、兩手で顔を隠す——間——ナットは茫々しく囁く）俺は、時たま——自分が怖ろしくなる時があるよ。

シュ まあ、ナット。どうして。

ナット （烈しく）父と、父の呼びかけてゐる海とのためだ。父は、あの忌々しい海へ、俺を子供の時に無理やりに連れて行つたんだ——俺の片腕を奪ひとつて、こんな不具者にしてしまつたあの海へ。

シュ （嘆願するやうに）あなたの運が惡かつたからつて——お父さんの事は惡く仰しやらないで頂戴。

ナット 父は、俺を學校を止めさして、無理やりに船へ連れて行つたんだ。さうぢやなかつたか。若し、父が自分の思ひ通りにやつてゐたら、俺は今だつて、父同樣な無智な水夫でゐなきやならなかつたに違ひない。俺の惡く思つてゐるのは、海ではない。俺の片腕を捲ぎとつて、海岸へ投げあげたので、父の考の駄目になつた海ではない——父のもう一つの難破だつたんだ。

シュ （嗚咽し）それあ、ひどいわ、ナット——殘酷だわ。もう隨分昔の事ぢやなくつて。どうして忘れる事が出來ないんでせう。

ナット （苦々しく）忘れる！　お前だつて覺えてるぢやないか。まあ、トムが今度の航海から歸つて來て、お前と結婚すれば新しい生活が始まるのだ——お前、お母さんのやうに、船長の妻になるのだ。樂しくお暮しよ。

シュ （哀願しながら）あなたも一しよに來て頂戴——お父さんもね——さうしたら——

ナット　お前の若い夫に、狂人や不具者の重荷を背負せようといふのか。（強く）いや、いや、俺は行けはしない。（執念深く）お父さんだつて行けるものか。（突然意味ありげに――考深く）俺は此處に留まつてゐよう。俺の著作が四分の三出來あがつてゐる――その本で、俺は自由になれるだらう。たしかに俺は、此處でその本をつくり上げなきやあならないのだ。それを書き始めたこの家を離れては、とてもやりとげられさうにもないのだ。（昵と彼女を見詰めながら）だから、どんな事があらうと――此處に留まつてゐよう。（シュは失望して啜泣く。暫く間をおいて、話し續ける）

――何時までも支拂しないで住んでゐていゝつて――若しも――

シュ　（怖れながら――反響の囁くやうに）若しも……

ナット　（彼女を昵と見ながら――苦しさうな聲で）若しも、父を、自分を惡くもせず――他人の邪魔にもならないところへ――やつてしまふなら。

シュ　（戰慄して）いけません――いけません。ナット。亡くなつたお母さんに濟まないぢやありませんか。

ナット　（あせりながら）何もさうするつて、言ひはしないぢやないか。どうして、そんな風に――俺を見るんだい。

シュ　ナット！　ナット！　お母さんに濟まないぢやありませんか。

ナット　（ぎよつとして）お止し。お止しつたら。お母さんは、あの世へ行つて――安らかに眠つてゐらつしやるのだ。お前は、お母さんの疲れた魂を、もう一度、お父さんのところへ連れて來て、打碎いて傷つけたいのか。

シュ　ナット！

ナット　（心にある何かを壓へようとするかのやうに、咽喉を摑んで――荒々しく）シュー　後生だから。（妹は不言な豫想を感じて、彼を昵と見詰める。ナットは努力しながら自分を落著かせて考深さうに話し續ける）スミスはかう言ふんだ。この地所をあいつに賣り渡すなら、現金で二千弗出さう――そして、俺を番人代りに、ただで置いてやらうつて。

シュ　（嘲るやうに）二千弗ですつて。まあ、抵當の値段よりは地所の方がずつと――

ナット　いや、それは地所の値段ぢあないんだ。俺の本のために――自由のために――現

金で得ることの出來るお金なんだ。

シュ　では、そんな理由で、あの人はお父さんを追ひやらうと言ふんですか。何て情ない人でせう。屹度スミスさんは知つてるんです。お父さんの遺言が——

ナット　地所を俺に與へるといふ遺言をかい。それは知つてるさ。俺が話したんだ。

シュ　（鈍く）まあ、何て卑しい人達でせう。

ナット　（説得するやうに）若しも、そんな風に取りきめたら——若しもさうなつたら——半分はお前のお嫁入の持參金にあげよう。それは正當な事だ。

シュ　（氣持を惡くして）人殺しのお禮のやうなお金なんか！　あたしがそんなものに指一本でも觸れるとお考へになつて。

ナット　（説得するやうに）ちつとも疚しい事なんか無いぢやないか。そのお金をお前にあげよう。

シュ　後生です。ナット。あたしを買收しようとでもなさるの。

ナット　さうぢやないさ。お前のものにして、少しも疚しい事がないんだ。（苦笑して）お前忘れてゐるんだね。わたしはあの寶の後繼者だから、金離れのいゝ事も出來ようつていふもんだ。はつはつ。

シュ　（驚いて）ナット！　あなたは何だか變だわ。病氣よ。若し普段のやうなら、そんな風に話す筈がないわ。あゝ、あたし達は、どうあつても此處から出てゆかなくちやならないのです——あなたとお父さんとあたしと。スミスの方は抵當流れにして了ひませう。抵當よりももつと値打のあるものがあるでせう。あたし達は、何處か小さい家へ移りませう——海の傍の——さうすれば、お父さんは——

ナット　（烈しく）お父さんは、俺と氣違ひじみた遊戯をやり續けてゆく事が出來るのだ——夢を耳元に囁いたり——海を指差したり——かういふもので俺を嘲つたりする事が出來るんだ。（ポケットから腕環を取り出す。それを一目見るや火のやうに怒つて、怖ろしい聲で叫びながら、隅へ投げつける）駄目だ！　駄目だ！　夢を見るには、もう遲い。もう遲過ぎる。今夜こそ、夢なんか棄ててしまつた——永久に。

シュ　（彼を見て、突然、彼女の怖れてゐた事がやつて來たのを感じる——長い呻と共に、差し伸し

た兩腕の上に頭を載せて）では――ほんたうにさうなさつたのなら――お父さんを裏切つたのです。おゝ、ナット、あなたに呪がかゝつてゐるのです。

ナット　（恐怖の眼差をちらと、上方の屋根の方へ投げて）しいつ！　お前何を言つてるのだ。海の見えないところへやつた方が――お父さんのためには好いのだ。

シユ　（鈍く）あなたは、お父さんを裏切つたのです。

ナット　（荒々しく）そんな事があるものか。そんな事が。（地圖をポケットから取り出す）まあお聞き、シユ。後生だから、俺の言ふのを聞いてくれ。御覽。島の地圖だ。（地圖を卓の上に擴げる）實は――十字を描いた處にあるのだ。（彼は息を呑みこむ。言葉に聯絡が無くなつて來る）俺は數年間、これを持ち廻つてゐたのだ。そんな事が、何になるものか。お前には、この地圖の意味が、分らないんだ。こいつあ、俺と俺の本との中間にあるんだ。こいつあ、俺と人生との中間にゐるんだ――俺を狂人に追ひ立てたんだ。父は俺に敎へたんだ、來る日も來る日も――父と一しょに期待して望をかけてゐるようにと――期待して望をかけてゐるようにと。その望が消えた時に――凡てが夢に過ぎない事が分つた時に――俺が、自分と自分の頭を疑ふようになつたのも、自分の眼を信じないやうになつたのも、それは父のためだ――俺はそれをどうする事も出來なかつたのだ。（眼が頭から飛び出しさうになる）とんでもない。俺は今でも信じてゐるのだ。それは氣違じみた事だ――氣違じみた事だ。お前、聞いてゐるのか。

シユ　（恐怖して彼を見ながら）そんな理由で――お父さんを憎むんですか。

ナット　いや、そんな事はない――（それから急に狂亂狀態になって）さうだ。俺は、父を憎んで、憎んでゐる。父は、俺の腦味噌を盜んだんだ。分らないかい、父から――父の狂氣から、おれは自分を自由にせずにはゐられなかつたのだ。

シユ　（怖れて――歎願するやうに）ナット。いけきせん。あなたの話は、まるで――

ナット　（荒々しく笑つて）まるで、氣違ひのやうだつて言ふんだらう。お前の言ふ通りだ――だが、俺はもう氣違ひぢやないんだ。御覽。（角燈を開けて、手にしてゐる地圖に火をつける。角燈を開けた時、焰はちら〳〵して、消える。二人は魅せられたやうな眸で、燃ゆる紙を見守る。彼は話を續ける）御覽。俺は自由になつた。正氣にかへつた。さあ今度は、醫者が

言つたやうに、事實の話をしよう。俺は嘘をついてゐたのだ。或人と言ふのは養育院から來た醫者なのだ。どうだ、この地圖の燃えやうは。跡方も無く燃え盡きるに違ひない——この有毒な氣違沙汰は。さうだ、俺は、嘘をついてゐたのだ——御覽——地圖は、無くなつてしまつた——點一つ殘さずに——そして、もう一枚の地圖は、サイラス・ホオンと一しよに海底深く沈んでゐるのだ。(彼は灰を床に落し、足で踏み潰す) 燃え盡きてしまつた。俺は、とうと——自由になつたのだ。(顏がすつかり青褪める。併し、落著いて話し續ける) さうだ。俺は、自分の魂を救ふために——お前の言ふやうに、父を裏切つたのだ。養育院からは、父を連れに來るのだ——

上方から、「帆を下ろせ」と云ふやうに響く高い不明瞭な叫と、地圖太鼓む足音とが聞える。上方で船室昇降口の引戸がぴしやりと明け放される。空氣がさつと部屋に流れ込む。

ナットとシュは跳び上り、それから石のやうに堅くなつて立つてゐる。

船長バアトレットが足音を立てゝ階段を下りてくる。

ナット (戰慄して) 大變だ! 聞えたのかしら。

シュ しいつ。

船長バアトレットが部屋へはひつて來る。

彼は息子のナットにひどく似てゐる。顏は息子よりは一層嚴格で侮り難い風を備へ、體格は一層逞ましく、眞直で、男性的である。豐かな髮も、針毛の口髭も眞白で、皺の多い顏の、日に燒けた革のやうな色と對照してゐる。むしやくしやした灰色の眉毛は、人を惱ますやうに光つてゐる鋭い黑い眼の上に、垂れ下つてゐる。彼は重い、二重釦になつた、青い上衣に、同じ布地でつくつた半ズボン、膝から下には護謨の長靴をはいてゐる。

バアトレット (氣遲ひじみた昂奮狀態で、息子の方へ大股で歩み寄つて、貫めるやうに指を立てる。ナットは、縮み上つて一歩退く) 俺を氣違だと思つてるんだらう。どうだ。この三年間、さう思つてるんだらう——あのスロカム號の馬鹿野郎どもが、マリイ・アランが難破したと言ひふらしたもんだから。

ナット (やつと息を呑みこんで——息が窒つたやうに) そんな事ありません——お父さん——わたしは——

バアトレット 嘘をつくな。この小僧つ兒。俺の後繼者にしてやつたのに、お前は——俺

を邪魔物にして逐ひやらうとしてゐるんだらう。氣違どもの味方をして、俺を牢獄の格子の中へ押し込まうとしてゐるんだらう。

シユ　いいえ、お父さん――そんな事は。

バアトレット　（彼女に默つてゐろと手を振つて）お前の事ぢやない。娘。お前の事ぢやないんだ。お前はお母と同じだ。

ナット　（すつかり靈魂めて）お父さん――あなたは思つてゐらつしやるんですか――わたしが――

バアトレット　（强く）嘘だ。お前の目の色で分る。お前を呪つてやるぞ。

シユ　お父さん。そんな事を仰しやるものぢやあ――

バアトレット　おせつかいするな。娘。あいつは信じてゐたんだ。さうぢやなかつたか。その癖、俺を裏切つたんぢやないか――俺を嘲り、何もかも嘘だと言ふんだ――その上、夢を信じるのは馬鹿だと言つて、あいつ自身をも嘲るのだ。あいつあ夢だと言ふんだ。

ナット　（宥めるやうに）そりやあなたの思違ひです。お父さん。わたしはほんたうに信じてゐます。

バアトレット　（勝ち誇つて）さうだとも。今度こそ信じていいんだ。自分の眼を信じない奴があるもんか。

ナット　（惑はされて）眼ですつて？

バアトレット　ぢや、お前、まだ見ないのかい。俺の喝采を聞かないのかい。

ナット　（混亂して）喝采ですつて。叫聲は聞えました。でも――何を喝采するんです――何が見えるんです。

バアトレット　さうだらうとも、罰が當つたんだ。（爆發的に）馬鹿な盲。マリイ・アランが歸つて來たんだ。南洋から――俺が誓つた通りに歸つて來たんだ。

シユ　（彼を落著かせようと努めながら）お父さん。靜かにして下さい。何でもありやありません。

バアトレット　（彼女には注意しないで――その服を、催眠術に罹つたやうに息子の上に据ゑて）半時間もたたないうちに、あの岬を廻つてやつて來るだらう――マリイ・アランが――俺

が誓つた通りに黄金を積んで――帆をまかないで――下の帆を風に孕まして――俺の誓つた通りに歸港するのだ――裏切者には、來ようが、晩過ぎたんだ――晩過ぎたんだ――俺が喝采した丁度その時、錨を下ろしたんだ。

ナット　（凋ろな憑れたやうな眼差で、眼と父の眼を見入る）マリイ・アランですつて！　然し、どうしてそれが分るんです。

バアトレット　自分の持船が分らなくつてどうするんだ。お前こそ氣が狂つてゐるんだ。

ナット　でも、夜ですもの――他の二檣縱帆船かも――

バアトレット　他の船であるもんか。マリイ・アランだ――月光の中にはつきりと見える。どうだ。覺えてゐるか、夜、港に著いた時に、サイラス・ホオンにするやうにと言ひつけておいた信號を。

ナット　（ゆつくりと）主檣の頂の赤と綠の光です。

バアトレット　（勝ち誇つて）では、さあ勇氣があるなら、外を見てみろ。（左手、舷窓の方へ行く）此處からはつきり見えるんだ。（命令するやうに）自分の眼を信じないのか。見

てみろ――俺を氣違と呼ぶのはそれからにするがいい。

ナットは舷窓から覗き、驚いて跳び退り、啞がものを見つけた時のやうな表情をする。

ナット　（ゆつくりと）主檣の頂の赤と綠の光です。さうです――日中のやうにはつきりと。

シュ　（氣を揉みながら彼を見て）あたしに見せて頂戴。

舷窓の方へ行く。

バアトレット　（烈しい滿足の色を現して、息子に）どうだ。今度こそはつきり見えるだらう――お前には見えやうが遲過ぎたんだ。（ナットは魅せられたやうに彼を見詰める）上の方では俺にはよく見えた――ホオンとケイツと布哇人のチミイが、甲板の上で月光を浴びながら俺の方を見てゐるのが。さあ、行かう。

彼は大股に船室昇降口に歩んでゆく。ナットがその後に續く。二人は階段を上る。

シュは、驚いて困惑した表情を浮べながら、舷窓から振り向く。頭をもの哀しさうに振る。

上方から、バアトレットの聲で「マリイ・アラン、あほい！」と言ふ叫が聞える。それに續いてナットが同じやうに喝采した反響のやうな響が聞える。

シュは慄へながら、両手で顔を掩ふ。
ナットは船室昇降口を下りて來る。その瞳は、荒々しく昂奮してゐる。

シュ　（がつかりしたやうに）今夜は、お父さんがいけないのです。ナット。もつともです——お父さんの機嫌を取るのは。機嫌を取るのが一番ようございますわ。

ナット　（野蠻に）機嫌を取るつて。お前、一體何を云つてるんだ。

シュ　（舷窓を指して）あすこから何にも見えはしないぢやありませんか。ナット。港に船なんかゐやあしないぢやありませんか。

ナット　お前は馬鹿だ——でなきや盲だ。マリイ・アランは、誰の眼にもはつきりとあすこに見えるぢやないか。赤と綠の信號燈を上げてゐるんだ。馬鹿な奴等が、マリイ・アランが難破したと嘘をついたんだ。俺も馬鹿の一人だつたんだ。

シュ　でも、ナット、何にも見えやしませんよ。（再び舷窓の方へ行く）船なんかありやしないわ。見て御覽。

ナット　俺には見えた。上の方からはつきりと見えた。

ナットは彼女から振り返つて、卓の傍の自分の席に歸る。シュは驚いて歎願するやうに彼に眼いて來る。

シュ　ナット！　それあいけません——あなた方は、昂奮して慄へてゐらつしやるのです。

ナット　宥めるやうに彼の額に手を置く。

ナット　（彼女を荒々しく突きのけて）盲の馬鹿者！

バアトレットが船室昇降口の階段を下りて來る。その顔は、夢の實現した歡喜の色に變つてゐる。

バアトレット　ボートを下ろした——あの三人が——ホオンとケイツと布哇人のヂミイが——岸へ漕いで來る。オールの鳴るのが聞えた。そら、耳を澄してみな。

間。

ナット　（昂奮して）あ、聞えるー

シュ　（兄の傍の椅子に坐つてゐたが——警戒するやうに囁く）それは、風と海鳴の音ですわ。

ナット。

バアトレット　（突然）聽け！　上陸したぞ。歸つて來ると俺が誓つた通り、又、陸へ歸つて來たんだ。今度はこつちへ遣つて來るだらう。

彼は注意深い態度で立つてゐる。

ナットは椅子で身をのり出す。

風と海鳴の音が突然止んで、重苦しい沈默。强い綠の輝が、靜かに部屋の中へ、液體のやうに調子のある波をなして流れこむ。――微かに光の貫いた海底のやうである。

ナット　（妹の手を握つて――息を窒らしながら）御覽、光が變つたぜ。綠と金色だ。（身慄ひする）深い海の底だ。俺は幾年も溺れてゐたんだ。（ヒステリックに）助けてくれ！　助けて！

シュ　（彼の手を慰めるやうに撫でながら）月光だけだわ。ナット。變りはしない事よ。落著いてゐらつしやい。何でもありやしないのよ。

綠の光は益々濃くなる。

バアトレット　（唸るやうな單調な調子で）あいつ等は、靜かにやつて來る――靜かにやつて來る。重いんだ。さうだ、重いんだ――二つの箱が。聽くがいい。下の戸口のところへやつて來たぞ。そら、聞えるだらう。

ナット　（跳び上つて）聞える！　わたしは戸を明け放しておいた。

バアトレット　あいつ等のためにかい。

ナット　さうです。

シュ　（慄へながら）しいつ。

戸の重くがたりといふ音が、家の下の方から聞える。

ナット　（妹に――昂奮して）そら、聞るだらう。

シュ　鎧戸が風で鳴つたのよ。

ナット　風なんかあるもんか。

バアトレット　こつちへ上つて來る。上つて來る。あいつ等は重いんだ――重いんだ。素足の足音が下の床から響いてくる――やがて、階段を登つて來る。

ナット　そら、足音が聞えるだらう。

シュ　鼠が走り廻つてるだけよ。何でもありやしないわ。ナット。

パアトレット　（戸口へ突進して、それを明け放す）はいれ。若いの。はいるがいい！　――よく遣つて來た！

サイラス・ホオン、ケイツ、布哇人ザミイの姿が、音も無く階段から部屋へはひつて來る。後の二人は象眼細工のある重い箱を二つ運んで來る。

ホオンは鸚鵡鼻の角張つた姿の老人で、灰色の木綿のズボンをはき、チョッキは毛の多い胸のところで廣く開いてゐる。ザミイは背の高い、逞しい、青銅色をした若い布哇人である。腰に布を卷いてゐるだけである。ケイツは圓く肥り逞しさうで、ズックのズボンに、裂けた白い水夫用のブルーズを著てゐる。それは鐵の錆で汚れてゐる。

皆、裸足で、水が、びしよ濡れの腐つた著物から滴つてゐる。髪の毛は縺れて、泥々した海草が絡みついてゐる。

彼等は音も無く部屋に滑りはひつた時、驚いて眼を廣く見開いた儘、空を見詰めてゐる。彼の肉體は青い光を浴びて、今にも腐敗しさうな風に見える。體は、深海の長い浪のうねりの動きに從ふかのやうに、無氣力に無神經に搖れる。

ナット　（彼等の方へ一歩近づいて）よう！　（狂亂して）皆の者、よく歸つて來た！

シュ　（彼の腕を摑んで）お坐り。ナット。何でもありやしない事よ。誰もゐやしない。お父さん――お坐り。

パアトレット　（三人の者に、にやりと笑ひかけて、指を唇に當てゝ）此處ぢやいけない。此處ぢやいけない――あいつの前ぢやいけない。（息子を指さす）今ではもう、あいつには權利が無いんだ。さあ、來給へ。寶は俺たちだけの所有だ。寶を持つてあつちへ行かう。さあ、來給へ。（彼は船室昇降口の方に行く。三人の者がそれに續く。昇り口で、ホオンはぶらぶらする手を肩に載せ、今一方の手で、一枚の紙片を父に渡す。パアレットはそれを受取り、勝ち誇つたやうにくす〳〵笑つて）これが當り前だ――あいつには――これが當り前だ。

彼は階段を登る。

三人の姿はその後にふら〳〵しながら跟いてゆく。

ナット　（狂氣のやうになつて）待て！

船室昇降口の方へ行かうと藻掻く。

シュ　（彼を引き止めようとしながら）ナット――いけません。お父さん――歸つて頂戴。

ナット　お父さん！

彼女を押し退けて、昇降口の方へ突進し、引戸を亂打する。戸は下ろされて了つてゐるらしい。

シュ　（ヒステリックに――荒々しく正面の戸口に驅け寄る）助けて！　助けて！

彼女が戸のところへ行つた時に、醫師ヒギンズが急ぎ階段を登つて姿を現はす。

ヒギンズ　（昂奮して）丁度いい時でした。一體どうしたんです。

シュ　（喘ぎながら）父が――あの上に！

ヒギンズ　暗くて目が見えませんが――わたしのカンテラは何處でせう。あ、此處でした。

（彼はカンテラで、彼女の恐怖に打たれた顏を照し、それから素早く部屋の周りを照す。青い輝が消え、風と海との響が再び聞える。明らかな月光が舷窓から流れこむ。ヒギンズは船室昇降口へとんでゆく。ナットは戸を亂打してゐる）此處でしたか。バアトレットさん。わたしにやらせて御覽なさい。

ナット　（降りて來て――鋭い眼付で醫者を見る）鍵を掛けて行つたんです。登つてゆけないんです。

ヒギンズ　（見上げて――驚いた聲で）どうしたんです。バアトレットさん。すつかり明いてるぢやありませんか。

登りかける

ナット　（警戒する聲で）危いですよ。あいつ等に氣を附けなきやいけません。

ヒギンズ　（上から下に向つて言ふ）あいつ等つて。誰です。此處には誰もゐはしません。（突然――驚いて）上つて來て下さい。手をかして下さい。お父さんが氣が遠くなつてゐらつしやる。

ナットはゆつくり登つてゆく。

シュは角燈の方へ行き、火を點し、それを手にして急いで船室昇降口の上り口へ歸つてゆく。

上方で取つ組み合ふ騷がする。

彼等は、船長バアトレットの體を運びながら、再び姿を現はす。

ヒギンズ　さあ、靜かに、靜かに。（彼等は父を正面の寢臺に寢かす。シュは寢臺の傍へ角燈を置く。ヒギンズは腰を屈めて、鼓動に耳を傾ける。それから頭を振りながら、立ち上つて）お氣の毒ですが――

シュ　（鈍く）息が切れたんでございますか。

ヒギンズ　（叩頭いて）心臓痲痺、だらうと思ひます。（慰めようとして）恐らくこの方が好かつたかも知れません、若しも――

ナット　（昏睡のうちにあるかのやうに）ホオンが何か手渡したんですが。見えませんか。

シュ　（手を揉み合せながら）まあ、ナット。靜かにして下さい。お父さんはお亡くなりになつたんですよ。（ヒギンズに哀願するやうに）濟みませんが、向うへ行つて頂けませんでせうか――行つて――

ヒギンズ　わたしの力の及ぶ事は何もございませんか。

シュ　行つて頂けませんか――何卒――

ヒギンズは固苦しい挨拶をして出て行く。ナットは、抵抗出來ない魅力に捕はれたかのやうに、父の屍の方へ靜かに近寄る。

ナット　お前、見はしなかつたか。ホオンが何か手渡したんだ。

シュ　（啜泣きながら）ナット。ナット。あつちへ行つて頂戴。お父さんには手を觸れないで下さい。あつちへ行つて頂戴。

然し、ナットは彼女に注意しない。寢臺の側へ垂れ下つてゐる父の右手に、眼と目を据ゑる。彼はその手に跳びかゝつて、固く握つた手を非常に努力をして、こぢ明けて、皺苦茶に圓めた紙を掴み出す。

ナット　（脾ち誇つた叫を擧げながら、それを頭の上で振り廻す）御覽。（屈みこんで、それを角燈の光に展げる）あの島の地圖だ。御覽。結局俺の手に殘つた。まだ機會があるのだ――俺の機會が。（氣違染みた物々しい決心で）この家が賣れたら、俺は行かう――行つて、見つけよう。御覽。ここに、父の手蹟でかう書いてある。「寶は十字のある處に埋めらる」つて。

シュ　（兩手で顏を掩ひながら――がつかりした容子で）後生です。あつちへ行つて頂戴。ナットあつちへ行つて頂戴。

――幕――

『海外文學新選』趣旨

◆近代文學の未だ紹介せられざる名篇と共に時代に先驅する最新の作品を網羅し、パンフレット型の廉價版として公にする。

◆全然原語より移して一切の重譯を避けるは勿論、編纂者に於いて十分の信用を置き得可き譯と認めたものゝみを收める。

◆第一期刊行として既に決定せるもの百五十册。毎月約三册を隨時出版する。

第一期百五十册發行

大正十三年六月廿五日印刷
大正十三年六月廿[illegible]日發行

長い歸りの船路――價六拾錢

飜譯者　北村喜八
東京市牛込區矢來町三番地
發行者　佐藤義亮
東京市牛込區矢來町三番地
發行所　新潮社
電話牛込（八八〇〇六番　八八〇〇七番　八八〇〇九八番）
振替東京一七四二番

印刷所　東京市小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社
電話小石川五九二番

海外文學新選

(1) **死刑をくふ女**（小說）
最も新らしき世界的文豪と稱せらるゝイバニェスの作中から、『死刑をくふ女』『キネマの老婆』以下數篇、何れも其の特色の鮮かなものゝみである。
ブラスコ・イバニェス〔西〕 永田寛定氏譯

(2) **チヤッテルトン**（戯曲）
清高なる使命を汚濁の世に齎せる一詩人に配するに、闇に咲く花の如き一人の少女を以てし、嚴肅なる宗教味に、哀婉の情趣をあざなへる名篇。
アルフレッド・ウィニイ〔佛〕 小林龍雄氏譯

(3) **イスカリオテのユダ**（小說）
キリストを賣れる叛逆者のユダを、地下に起して、その寃を愬へしめたもので、深遠なる人生的意義を寓した、頗る氣品の高き象徵藝術である。
アンドレエフ〔露〕 米川正夫氏譯

(4) **勝利者と敗北者**（戯曲集）
現下世界劇壇の第一人者たるゴルズワーシーの寶石の如き三小戯曲の集。心理解剖の精妙を極めた傑作。『小夢曲』、『小男』の二篇を附錄とした。
ゴルズワーシー〔英〕 山田松太郎氏譯

(5) **影の彌撒**（小說集）
フランス氏の短篇傑作集。近代象徵詩派の翹楚ヴルレエヌが、多面多彩の風手を傳へたる『ザエスタス』以下數篇。此の老文豪會心の作のみである。
アナトール・フランス〔佛〕 山内義雄氏譯

一册價六拾錢——送料六錢づゝ

海外文學新選

第一期刊行百五十册——毎月約三册刊行

(6) **エブラハムリンカーン**（戯曲）
若き英國劇壇人氣第一の作家の出世作。米國の產んだ最大最善の政治家。大きな愛に動く偉人の涙と力とは、何人をも動かさずには置かない。
ドリンクウオター〔英〕 横山有策氏譯

(7) **彼女は眠れり**（小說集）
男女の微妙な心理の交渉を描ける中に、謎の如き彼れ獨自の諷刺を投げたものゝみで、人生の苦しい跫音は、どの作からも重々しく響いて來る。
ドウイモフ〔露〕 梅田寛氏譯

(8) **三分間のローマンス**（小說集）
表現派の小說の本邦に紹介さるゝは本書その文壇の權威で表現派の領袖と稱さるゝ人。玆に會心の作數篇を收めた。
ハインリッヒ・マン〔獨〕 青木武雄氏譯

(9) **長い歸りの船路**（戯曲集）
米國の有する世界的大劇作家の傑作集である。一幕物三曲、何れも其出世作であつて、日本の舞臺に上ぼしても歡迎さるゝこと疑ひないと思ふ。
ユーヂン・オニイル〔米〕 北村喜八氏譯

(10) **盲人國その他**（小說集）
現下英國第一の小說家、第一の思想家の短篇傑作五種を收めた。皆、日本の英國教科書に載つてゐるものゝみで、讀者の興味も亦格別であらう。
エチ・ジー・ウエルズ〔英〕 石井眞峰氏譯

ストリンドベルク戯曲小説全集

出づ！　天下の渇望久しかりし此の大文豪の大全集愈々出づ。各篇獨逸シエリング譯本により、一字一句に泣血の苦心を拂へる稀有の名譯也。

戯曲	ダマスクスへ	楠山正雄氏譯	參圓五拾錢 送料拾六錢
戯曲	自然主義劇と十一の一幕物	楠山正雄氏譯	參圓五拾錢 送料拾六錢
戯曲	祝祭曲と小劇場曲	楠山正雄氏譯	參圓五拾錢 送料拾六錢
自叙傳小説 (1)	女中の子	福田久道氏譯	參圓五拾錢 送料拾六錢
自叙傳小説 (2)	或る魂の發展	秦豐吉氏譯	（近刊）
自叙傳小説 (3)	痴人の告白	三井光彌氏譯	價參圓 送料拾貳錢

515
130

終